然な不可避的なものであつたが、しかし何人も、其れを稱讃し、理想に持たうなぞとは考へなかつた。あらゆる人々が、分裂に就いて悲嘆し、あらゆる人々が、其の指導下に置かれ、而して、分裂なせる集團を、一の緊密なる黨組織其のものに、結合することを願つたのであつた。かくて今や、この現象が現れてゐる際に、吾々は、無政府主義的な空言虛語によつて――より高き理解による組織形態なるものの中に――自己を引き戻し、處理しようとしてゐる！　團體の家庭的氣持よさを持つ、くつろいだ寢衣やスリッパに、慣れてしまつてゐる人達は、その形式的な規約を、理論鬪爭の自由な『過程』にとつて、窮屈な而も肩苦しい、重荷で而も平凡な、官僚的で、奴隷化的で而も有害なものとして、見るであらう。貴族的な無政府主義者達は、その形式的な規約が、團體の狹隘な結合を、廣大な黨の構造に置きかへる爲めには、眞實、必須なものであるといふことを理解してゐない。團體內部の乃至は團體間の結合は、規約の設定を必要とせず、また設定することが出來ないが、其れは、この結合が、個人的友情もしくは盲目的で理由のない『信賴』に、基づくものであるからである。しかし、黨の結合は、そのいづれにも基づくことが出來ないものであつて、實際其れは、『形式的に、官僚的』に（何らの訓練を持たない知識階級の見地からすれば）作製された規約に、基礎を置かなければならないのだ。されば、この規約を嚴守することは、

ひとり吾々を、理論鬪爭の自由な『過程』を唱へるところの、團體の特質や氣まぐれやだらしない方法から救ふ道である。

新『イスクラ』の編輯者達は、『信賴は、人の心や頭に、はつきりと判らせることの出來ない、デリケートなものである』（附錄第五六號）と、敎訓的な注意を述べて、アレキサンドロフをへこました。實際、信賴の、つまり赤裸な信賴の範疇に就いて、このやうに論ずることが、單にもう一度、彼等の貴族的無政府主義と組織上のクヴオステズムを、曝露するものだといふことを、編輯者達は理解してゐないのである。私が、單に團體の一員であつたなら、編輯員六名の中の一人であつても、或は『イスクラ』の組織の中の一人であつても、私は其の時、單に不明瞭な理由のない不信賴を唱へて、Xと一緒に働くことが、自分の苦痛であることを、何らか正當であると主張する權利を持つてゐた。しかしながら、私が黨員となつてゐる場合は、單に不明瞭な理由のない不信賴を唱へて、Xと一緒に働くことが、自分の苦痛であることを、正當であると主張する權利を、何ら持つてはゐない。何故かなれば、そのことは、古い團體の氣隨氣儘に、門戸を解放することになるからである。卽ち私は、自己の『信賴』もしくは『不信賴』を、規約上の理由によつて、說明する義務があるのであつて、謂はゞ、吾々の綱領、戰術、現約の正式に適應された條

件によつて、立證する義務がある。それ故私は、『私は信頼する』とか『私は信頼しない』とかいふやうな言葉に、自己を拘束することは出來ないが、しかし私の決定したことが、黨の各部の決定した總てのことに對して、黨全體の手前、その責任を持たなければならい。私は、自己の『不信頼』を表現する爲めに、それからこの不信頼から生ずるところの、意見や要求を、達成する爲めに、正式に規定された方法を、嚴守する義務を持つてゐる。吾々は、既に、團體の理由のない『信頼』といふ見地から、黨の見地にまで、卽ち、信頼の表現と統制に就いて、有責任に且つ正式に、規定された方法の嚴守を、要求するところのものにまで、急速に向上してゐる――しかしながら編輯者は、吾々を後退させようとつとめ、彼等のクヴオステズムを、新しい組織上の理解だと唱へてゐる。

吾々の所謂る黨の編輯者達が、編輯局に代表權を要求することの出來る著述家團體を、如何に批判したかを、吾々は單に見てみるとしよう。『吾々は反抗をしないであらうし、規律に對して、悲鳴をあげないであらう』と、規律を常に、侮蔑視するところの貴族的無政府主義者達は、吾々に說く。『吾々は、もし其れが愼重なものであるなら、其の團體と「一致」(原文のまゝ!)するか、さもなければ彼等の要求を、嘲笑するかするであらう』。

吾々はたゞ、彼等が如何なる高い貴族的な氣分を、卑俗な『工場形式主義』なるものに對して示したかを考察して見よう! しかし吾々は實際に於て、彼等が黨の一制度を代表してゐるのではなく、古い團體の一殘片を代表してゐるものだと考へてゐるが故に、そこに、編輯局によつて黨に說かれた團體時代の、塗りかへられた辭句を見るに過ぎないのである。このやうな立場に就いての內的虛僞は、無政府主義の深遠な思想にまで、不可避的に導いて行くものであつて、その深遠な思想は、僞善的な言葉に於ては、既に、衰滅的なものだと說いてゐるところの、その內部的崩解を、社會民主々義的な組織の原則にまで、高めるところのものである。下級及び上級の黨組織の何らの段階をも必要としないなら――貴族的無政府主義者にとつては、そのやうな段階は、官僚的な考案となる(アクセルロッドの論文參照)。全體に對する部分の從屬を、何ら必要としないなら、また、『一致』と分離との爲めに、黨の方法の『公式的官僚的』な定義を、何ら必要としないなら、古い團體的混亂は、組織の『眞に社會民主々義的』な方法といふ美辭麗句によつて、神聖化されるかも知れないのだ。

こゝに、『工場』の學校を卒業したプロレタリアが、無政府個人主義者に對して、敎育を行ふことが出來もするし、また行はなければならない理由が存在する。階級意識のある勞働者は、知識

階級から、そのやうな臆病を感知する、ずつと以前に既に、襁褓を脱ぎすてゝしまつてゐる。階級意識のある勞働者は、社會民主々義者内の知識階級に、彼れが見出したところの、彼等の豐富な知識と廣い政治的見地を、評價することを知つてゐる。しかしながら、吾々によつて如何に眞實な黨が、つくられなければならないかといふこと其の爲めには、其れに比例して、彼等、階級意識ある勞働者達は、プロレタリア軍の戰士の心理と、無政府主義的空言虛語を以て、飾り立てられてゐるプルヂョア知識階級の心理に、差異あることを、學ばなければならない。彼等は、黨員の義務の遂行といふことが、單なる黨員によつてのみではなく、『尖鋭』分子によつても行はれなければならないものだといふことを、學ばなければならない。また彼等は組織問題に於けるクヴオステズムを、戰術の問題に於けるクヴオステズムに對すると同樣な、侮蔑を以て、扱はなければならないことを、學ばなければならない。

組織問題に於ける新『イスクラ』の最後の特質、つまり中央集權主義に對する自治主義の辯護は、ジロンド主義と貴族的無政府主義との解きがたき結合の中に見られる。實にこの本質の意味するところは、(もし一般的に其れが、何らか意味を持つならば)[1] 官僚主義と專制主義に對する悲鳴であり、(黨大會に於て、自治主義を辯護したところの)新イスクラの理由のない侮蔑に對する、

限りなき悲嘆であり、『無條件的服從』の要求に對する喜劇的叫喚であり、『大言壯語』に對する悲しげな嘆息等々であるのである。あらゆる黨の日和見主義的翼は、常に、綱領に就いても、猶ほまた戰術と組織に就いても、あらゆる後退を、辯護し是認しようとつとめる。而して、新『イスクラ』の組織的後退(クヴオステズム)の擁護は、自治主義の擁護と密接に結びつけられてゐる。勿論その自治主義は、一般的見解によれば、舊『イスクラ』の三年間に亘るお說教によつて、非常に信用を落し、而して、新『イスクラ』は、公然と其れを辯護することを、自ら猶ほ耻ぢてゐるほどである。されば新『イスクラ』は、中央集權主義に對する共鳴を、猶ほ吾々に保證するが、しかしその中央集權主義といふ文字を、イタリックで書くこと、單に其のことによつて、其れを表明してゐるに過ぎない。實際に於て、新『イスクラ』の『眞に社會民主々義的』な(無政府主義ではない?)所謂る中央集權主義の『原則』を、極く僅かでも批評的に見るなら、其れは、一歩々々自治主義の見地を暴露するものである。かくて今や、アクセルロッドとマルトフが、組織問題に於て、アキモフに贊同することになつたことは、何人にも明白なことではないか? かくて、『新イスクラ派の理由のない侮蔑』に就いての、かの有名な言葉に於て、彼等は自身、其れを堂々と聲明したのではないか? かくてアキモフと彼れの仲間は、黨大會に於て、自治主義を辯

護したものではないか？

マルトフとアクセルロッドは、同盟の評議大會に於て、實に自治主義（もし全く無政府主義でないなら）を、辯護したのであつた。彼等は、部分が敢て全體に從屬するものではなく、全體との關係を、限定するに當つては、部分は自治的なものであり、而もこの關係を規定する在外同盟の規約は、黨の大多數の意志に關せず、また、黨中央部の意志に關せず、有效なものであるといふことを、馬鹿らしい熱心さを以て、證明しようと試みた。同志マルトフは、實に自治主義を、新『イスクラ』（第六〇號）の欄に於て、中央委員會によつて、地方委員會に黨員をひき入れようとする問題が起つた際、公然と今や辯護したのであつた。私は、同志マルトフが、同盟の評議大會に於て、自治主義を辯護し、且つ新『イスクラ』[二]に於て辯護したところの、その子供らしい詭辯に就いては、論じないことにする——私がこゝで、論じようとすることは、中央集權主義に對して、自治主義を辯護しようとする、明白にして固有の傾向が、組織問題に於ては日利見主義を特徴づけるところの、原則的特質として現れるといふこと、單にそのことに就いてである。

（一）、私は、この項に於けるがやうに、こゝでは、附加選擧に對する悲嘆を、考慮外に置く。

（二）、同志マルトフは、規約の種々な箇條を見究めてゐるが、しかし部分に對する全體の關係に就いて扱つたところの、

總ての箇條を、眞實看過してゐる。中央委員會は、『黨の力をふり當てる』といふ（第六條）。しかし一體、一の委員會から他の委員會にと送り出す黨員がなくして、吾々は力をふり當てることが出來るのであるか？　このやうなくだらないことを、取り扱ふのは、眞實吾々は、恥しいことである。

新『イスクラ』（五三號）には、官僚主義の概念分析の殆ど唯一の試みが、『公式的官僚主義』に對する、『公式的民主々義の原則』（傍點は筆者）の對立を掲げてゐる。この對立（不幸にも、新イスクラ派に對する關說同樣に、少しも展開されず明白にされてゐない）は、一の萠芽的價値を包有してゐる。つまり民主々義に對する官僚主義は、自治主義に對する中央集權主義であり、社會民主々義者の日和見主義的組織理論に對する〇〇〇社會民主々義者の組織理論である。而して民主々義者は、下から上へ行かうとするものであり、從つて、單に可能である場合及び非常に可能である場合には常に、其れは、自治主義や『民主々義』を辯護し、（非常に激情的な場合は）無政府主義の極限にまで達する。しかしながら〇〇〇社會民主々義者は、上から出發しようとつとめるものであつて、部分に對する中央部の權利及び權能を、充分に擴大することを主張する。分裂の時代と團體の時代に於ては、〇〇〇社會民主々義を、組織的なものたらしめることにつとめるこの尖鋭分子は、その活動力と、それによつて生ずる〇〇〇態度の力を、最も影響力あるもの

たらしめる團體(グループ)の一つでなければならない。(吾々の場合に於て――『イスクラ』の組織)。黨の眞實な統一の復舊時代と、この統一への古くさくなつた團體の分解時代に於ては、この尖鋭分子は、絶對的に、黨の最高機關としての黨大會でなければならない。その黨大會とは、活動的な組織の總ての代表者を、出來るだけ集め、中央制度なるものを(屢々、前進分子が、後進分子よりも、より滿足する組立に於て)設置し、而して其れを、次の黨大會に至るまで、尖鋭部分たらしめるものである。そのやうなことは少くとも、歐洲の社會民主々義に見られるところのものであつて、この無政府主義理論からは嫌はれてゐるところのものは、徐々にではあるが、何らの努力なしにではなく、また何らの鬪爭及び論爭なしにではなく、アジヤの社會民主々義にもまた、今や、ひろがり始めてゐるのである。

私が上に示したところの組織問題に於ける、日和見主義の原則的特質(自治主義や知識階級的乃至は貴族的無政府主義やクヴオステズムやジロンド主義)が、全世界の總ての社會民主黨の、それ相應な差異に從つて、〇〇〇な翼と日和見主義的な翼との區分を、如何に示すか(また如何にこれを示さないか)といふことを、考察す可きであるといふことは、其れは、非常に興味の度の高いことである。これはつまり、獨逸社會民主黨が、サツクセン選擧區の第二十區に於て、選

擧に敗北し(所謂ゲーレ事件)[1]、黨組織の原則を、議事日程にのぼした時、極く最近、特に明白に、獨逸社會民主黨に於て見られたのであつた。獨逸の日和見主義者達の熱心は、この面倒な事件に觸れる爲めに、原則的な問題を、特に、其れに對して加へたのであつた。ゲーレ(昔の牧師で、かなり有名な書物、卽ち『三ケ月工場勞働者』の著者で、而もドレスデンの黨大會の『勇士』の一人)は、自己廣告をなせる日和見主義者であつて、而して、頑强な獨逸日和見主義者の機關紙『ゾチヤリステツシエ、モナーツヘフト』(社會主義月報――譯者)は、直ちに彼れを、擁護することになつた。

(一)、ゲーレは、一九〇三年六月十六日、サツクセン選擧區の第十五區に於て、國會に選擧されたが、ドレスデン黨大會の後に、彼れは、その職を辭した。しかし、ロゼノフの死後、缺員となつた第二十選擧區の選擧人達は、再びゲーレを、候補者におさうと考へた。ところが黨の指導部とサツクセンの煽動委員會とが、それに反對をなすことになり、勿論彼等は、正式にゲーレの立候補を禁ずる、何等の權利を持つてゐなかつたが、而も彼等は、ゲーレが立候補することを、遂に阻止してしまつたのである。而して、その選擧に於ては、社會民主黨が敗北したのであつた。

綱領に於ける日和見主義は、自然、戰術に於ける日和見主義と、組織問題に於ける日和見主義とに結びついてゐる。同志ヴオルフガンク、ハイネは、この『新しい』見地を、說明しようとしたものである。が讀者諸君に、社會民主黨に加入して、日和見主義的常習思想を持ち込んだとこ

ろのこの典型的な知識階級の特質を紹介する爲めには、同志ヴオルフガンク、ハイネが、獨逸の同志アキモフよりも、いくらか小人物であつて、獨逸の同志エゴロフよりは、小人物ではないといふことを述べれば、それで充分であるだらう。

同志ヴオルフガンク、ハイネは、新『イスクラ』に於ける、同志アクセルロッドよりも、より以上の尊大さを以て、『ゾチヤリステッシエ、モナーツヘフト』に乘り出して行つた。『ゲーレ事件に對する民主々義的覺書』(『ゾチヤリステッシエ、モナーツヘフト』一九〇四年第四號、二八一頁)とは、何といふすばらしい論題だ。而も内容は、重味のないものではない。同志W、ハイネは、『選擧區の自治の侵害』に對して、怒鳴りちらし、『民主々義的原則』を辯護なし、また、人民による自由な代表選擧に於ての、『與へられた權力』の干涉(卽ち黨中央部の指導)に對して、抗議をなしたのであつた。同志W、ハイネは、吾々に說き示してゐる、其れは偶發的な中間事件に關する問題ではなくして、『黨に於ける官僚主義及び中央集權主義への一般的な傾向』、卽ち、既に早くから感知されてはゐたが、今や特に、危險なものとなつてゐるところの傾向に關する問題なのであつた。吾々は、『黨の地方の諸制度が、彼等の生活の支持者であるといふことを、原則上認め』なければならない(同志マルトフの小冊子『少數に於て今一度』からの剽窃)。吾々は、『總ての重

要な政治的決定が、中央部から出る』といふことに、慣れてはならないし、黨は、『生活との連結を失つたところの、空論的政策』に就いて、警告を發しなければならない(黨大會に於ける同志マルトフの演說、卽ち『生活は自ら權利を取得する』といふ演說からの引用)。『……もし吾々が、問題を根本的に見究めるならば』と、同志W、ハイネは、彼れの議論を深めて說く『而して、到る處に於けるがやうに、こゝでもまた强大な協力をしてゐるところの、個人的相違を看過するならば、其の時吾々は、修正派に對する煽動の中に、「局外者」に對する當局者の不信用が、實に全く明瞭に存在することを知るものである』(W、ハイネは、明かに『攻圍狀態』に關する小冊子を讀んでゐないもので、從つて英國風な局外者を說いてゐるのである)。『稀有に對する慣習の不信用、個人的制度に對する非個人的制度の不信用が』(個人發議權の壓迫に關する、同盟の評議大會に於けるアクセルロッドの決議案を參照)。卽ち『簡單に述べれば、黨の官僚主義化及び中央集權主義化に對する好意として、上に述べたところと同一の傾向が、存在するのを知るものである』。『規律』の概念は、同志W、ハイネに於ては、同志アクセルロッドに於けるよりも、より以上に上品な反對論を生ぜしめた。『……修正派の連中は、規律の缺乏を非難された』と、彼れは書いて云つてゐる『何故かなれば、彼等は、黨の統制の下に置かれてゐない、且つ、社會民主々義雜

誌の特質を奪はれてゐるところの機關紙、「ゾチヤリステッシエ、モナーツヘフト」に、執筆してゐるから。既に、「社會民主々義」といふ概念を、狹ばめようとするこの試みは、精神的所產の領域に於ける卽ち絕對自由が支配しなければならない領域に於ける規律のこの强調は』(注意せよ、精神的鬪爭は、一過程であるが、組織上の形式は、單に形式であるのだ)其れは、『官僚主義と個性の壓迫とへの傾向を示すものである』。而して同志W、ハイネは、長々しくもまた、力一杯の聲で、この厭う可き傾向に就いて、『總てを包括した大きな組織、出來るだけ中央集權化した戰術、理論』を創造することを怒鳴る。また、『無條件服從』や『盲目的從屬』の要求に反對して、彼れは怒鳴る。アクセルロッド流に、彼れはまた、『單純なる中央集權主義』等々に反對して、荒れ狂ふ。

斯くて、W、ハイネによつて口を切られた議論は、擴大されて行つた。獨逸の黨に於ては、其れは、附加選擧に就いての不平によつては、決してけがされはしなかつたし、また、獨逸のアキモフ達は、單に黨大會に於てのみではなく、絕えず彼等自身の機關紙にも、公然とその姿を出してゐたので、この議論は、直ちに、組織問題に於ける、正統派と修正派との根本的傾向の分析にまで導いて行つた。而して〇〇〇傾向の代表者として、(吾々と勿論同樣に、『獨裁』、『異端審問』及

び其の他の恐る可きものの主張者といふ非難を受けてゐる人物)K、カウツキイが現れ、(『ノイエ、ツアイト』「新時代の意——譯者」)一九〇四年、第二八號、三六頁に於て、『選擧區と黨』といふ論文を發表した。W、ハイネの論文は、『全き修正派的傾向の思想範圍』を說いてゐると、カウツキイは說明した。單に獨逸に於てのみではなく、フランス及びイタリイに於てもまた、自治主義や黨規律の減殺及び揚棄を望む、日和見主義的情火と情熱とは、一般に非組織への傾向、それから『民主々義的原則』の無政府主義への墮落の傾向を招來するものである。『民主々義は、決して支配の缺如を意味しない』と、K、カウツキイは、組織問題に於て、日和見主義者に說き示してゐる『其れはまた、無政府を意味するものではなくして、人民の自稱奉仕者が、實際は人民の支配者となる支配形態とは反對な、大衆の任命によるところの人達に對する、大衆の支配形態を意味するものである』。K、カウツキイは、かくて、諸國に於ける日和見主義的自治主義の非組織的役割を、詳細に追究し、所謂る『多數のブルヂヨア分子』(一)の加入が、日和見主義や自治主義や規律無視の傾向を、强めるものであることを指摘した。而して彼れは猶ほ、繰り返し强調して述べた『組織は、プロレタリアートを解放するところの武器であつて、其れは、階級鬪爭のプロレタリアート特有の武器である』と。

(一)、K、カウツキイは、例としてジョーレスをあげてゐる。彼等が、日和見主義に墮落すればするほど、益々これ等の人々には、黨の規律が、『彼等の自由な人間性を、甚しく抑制するもの』として、現はれなければならない。

獨逸に於ては日和見主義は、フランスやイタリイに於けるよりも、より微弱である。『自治主義的傾向は、獨裁者、大審問官、破門の宣告、異教徒裁判に對する多少の熱情的な演說や、反對者に云はしむれば、無限の爭ひをかもすところの、限りなき小不平などにまして、吾々に其れを、より廣汎には持ち來してゐないのである』。(一)

(一)、破門の宣告 (Bannstrahl) とは、獨逸に於ては、ロシヤの『戒嚴法』や『特別法』に等しいものである。それは、獨逸の日和見主義者達の『恐怖語』である。

黨の中の日利見主義が、獨逸に於けるよりも、より微弱であるロシヤに於て、自治主義的傾向なるものが、思想的方面よりはより少く、『熱情的演說』や小不平などよりはより多く、發展なしたといふことは、全く不思議なことではない。

さればカウツキイがまた、次のやうな結論に達したといふことは、何ら不思議ではない。『總ての國の修正派は、その多樣性と多彩性とに拘らず、おそらく他の如何なる問題に於ても、組織問題に於けるがやうに、それほど單純ではない』。この領域に關する、正統派と修正派との根本的傾向は、『恐怖語』卽ち民主々義に對する官僚主義なる言葉によつて、K、カウツキイにより、說明

されてゐる。『地方選擧區による國會の候補者選出に、黨指導權の働きかけを認めることは、民主々義の原則に對する恥づ可き侮辱でなければならない。卽ち、民主々義の原則は、總ての政治的活動が達成しなければならないがやうに、大衆の獨立行動によつて、下から上へを主張するものであつて、上から下への官僚主義的方法ではない。……そして民主々義的な一論據を示して見るなら、多數が少數に對して、優越權を握る可きであつて、その逆ではないのである……』。如何なる選擧區の國會議員の選出でも、全體としての黨にとつては、重大な問題であつて、候補者の決定は、黨の選任代表者によるものではあるが、それにはまた、黨が影響を與へなければならないのである。』これを、あまりに官僚主義的だとか、あまりに中央集權主義的だとか、考へる者は何人でも、候補者が、全體の黨員諸君の直接投票によつて、決定さる可きであるといふことを、主張するであらう。しかし、其れが不可能なことである限り、何人も、この問題が、全體としての黨に屬する他の多くのもの同樣に、一のもしくはより多くの黨制度によつて處理されるなら、民主々義的でなさ過ぎると云つて、不平を唱へるものはないであらう』。獨逸の黨の『習慣法』なるものによれば、個々の選擧區は、新立候補の爲めに、『親しく』黨の指導もしくは地方支部の指導を、受けることになつてゐる。『しかしながら、黨は、暗默のうちに認められてゐるこの習

慣法では、間に合はぬほど、大きなものになつてゐる。而して、その習慣法が、承認され得るものとしては考へられなくなるや、その權限、實にその存在さへが、論爭の種となるや、遂に一の法律ではなくなるのである。かくて、其れは明確に規定され、法に編成され、一の「正確なる規約の設定」(一)と「非常に嚴格な組織」にまで、導かれなければならない』。

(一)、暗默のうちに認められてゐる習慣法を、規約に規定された一の法律によつて、置き換へようとすることに關する、K、カウツキイのこの觀察は、一般的には吾々の黨が、特殊的には編輯部が、黨の評議大會以來經過しつゝあつたところの『變更』と比較して見ると、非常に教訓的なことである。

斯くて吾々は、他の事情の下に於てまた、組織問題に關する黨の日利見主義翼と○○○○翼との間の同じ鬪爭を見、中央集權主義と自治主義との間の、民主々義と『官僚主義』との間の同じ衝突を見、組織と規律との嚴格の度をゆるめ且つ其れを弱める同じ傾向を見るものである。卽ち、動搖不定の知識階級の精神と、確固不拔のプロレタリアートの精神を見、知識階級の個人主義とプロレタリアートの團體主義を見るものである。しかしこのやうな對立撞着に對して、ブルヂョア民主々義が、如何なる態度をとつたかといふことは、問題でなければならない。勿論ブルヂョア民主々義と云つても、其れは『虛忘な』歷史が、嘗つてひそかに、同志アクセルロッドに、明示することを約束したやうな民主々義ではない。『オスヴオボシユデニエ』の我が國の紳士達よりは、よ

り以上の教養のある、より以上の鋭い考察力を有する代表を持つ、獨逸に於ける眞の實際的な民主々義をさすのである。而して、獨逸のブルヂョア民主々義は、この新しい問題の論爭に對しては、直ちに戈を取り上げ、而も——丁度ロシヤのブルヂョア民主々義や各國の其れと同樣に——社會民主黨の中の、日和見主義的翼の爲めに、加勢したのである。獨逸取引所資本の有名な機關紙の『フランクフウルター、ツアイツング』は、騷々しい社說を發表し、(一九〇四年四月七日の夕刊、第九七號)、アクセルロッドの剽窃が、獨逸の新聞同樣に、明かに一の病氣になつてゐるといふことを示してゐる。フランクフウルト取引所の嚴格な民主々義紳士達は、社會民主黨に於ける『專制主義』、『黨の獨裁』、黨當事者達の專制的支配』、修正派全體を罰する爲めに用ひられるところのかの『破門の宣告』、『盲目的從屬』のかの要求、『不具な規律』、『從僕的服從』の要求、黨員を『政治的屍』たらしめんとする事實(これは螺旋や車輪よりは、より强硬手段である!)などを、てきびしく非難する。『各個人の特性は』と、取引所の紳士達はまた、社會民主々義者の反民主々義的風習に對して怒鳴る『總ての個性は、ジンダーマンが公然と明言してゐるがやうに、餘儀なくフランスの狀態を、卽ちジョーレス主義やミラン主義を、招來せしむるが故に、あくまで追究されなければならない』。ジンダーマン其の人は、サクセン社會民主黨の黨大會に於て、この

問題に關する報告をしてゐる。

もし新『イスクラ』の新標語が、要するに組織問題に對する原則的意義を、何らか含んでゐるなら、其れは疑ひなく、日和見主義的意義である。この推斷は、○○○○○翼と日和見主義的翼とが、分裂するに至つたところの、吾々の黨大會の全分析によつて、確證されるであらうし、また組織問題に於ける日和見主義を、同じ傾向や同じ非難や屢々同じ標語で云ひ現はしてゐるところの、全歐洲の社會民主黨の實例によつて、確證されるであらう。勿論、異る黨の國民的特性と、政治的關係の差異とは、その影響を與へないではゐないのであつて、從つて、獨逸の日和見主義は、フランスの日和見主義と同一なものではなく、フランスはイタリイの、イタリイはロシヤの日和見主義と同一ではないのである。しかしながら、そのやうな關係の差異が、存在するにも拘らず、○○○翼と日和見主義的翼とに、各國の黨が根本的分裂をなす點と、組織問題に於て正しい思想と日和見主義の傾向の存することは、明かに軌を一にしてゐるのである。(一)我がマルクス主義者や社會民主々義者のもとには、急進知識階級の代表者達が、非常に多數存在してゐるが故に、彼等の思想から生れるところの、日和見主義がまた、極めて種々な範圍に於て、而も極めて種々な形態に於て、現れるであらうといふことは、其れは避けがたきことである。されば、吾々は、

吾々の世界觀の根本的問題に於て、それから綱領の問題に於て、日和見主義と鬪つて來てゐるもので、目的に就いての完全なひらきは、正當なマルクス主義をけがしてゐるところの自由主義から、社會民主々義者の餘儀なき分離を、不可避的に導く。吾々はまた、戰術の問題に於て、日和見主義者達と鬪つて來てゐるもので、このあまり重大ではない問題に就いての、クリチエフスキイとアキモフとの分離は、勿論、單に一時的なものであつて、別箇の黨を結成することにまでは ならなかつた。今や、吾々は、組織問題に於て、マルトフとアクセルロッドの日和見主義を、克服しなければならない。この組織問題は、綱領と戰術との問題よりも、より根本的なものでないことは、自明なことであるが、其れは、現在に於ては、吾々の黨生活の前面に現はれてゐる問題なのである。

(一)、戰術問題に於て生じたところの、ロシヤ社會民主々義者の、經濟派と政治派とへの昔の分裂が、全國際社會民主主義者の、日和見主義と○○○○とへの分裂に、同一なものであることは、現在に於ては、何人も疑はないであらう。たとへ、一方に於ては、同志マルチノフとアキモフの、他の一方に於ては、同志フォン、フォルマールとフォン、エルムもしくはジョーレスとミルランとの間の差異が、非常に大きなものであるとは云へ、確かに、政治的非法の國と政治的自由の國に於ける情勢の差異は、強大なものであるにも拘らず、組織問題に於ける根本的範疇(カテゴリエ)の同一といふことは、また實に、疑ひなきことである。新『イスクラ』の獨斷的な編輯者達が、カウツキイとハイネとの論爭に、極く簡單に觸れ(第六四號)、而も組織の問題に於ける日和見主義と正統派との總ての根本的傾向に就いては、臆病にも筆を向けてゐ

ないのは、非常に特徴のあることである。

吾々が、日和見主義に對する闘爭を說く時、吾々は、あらゆる領域に於けるあらゆる近代日和見主義の、特殊な性質を、卽ち不明確な性質、曖昧な性質、捕捉することの出來ない性質などを、決して忘却しないであらう。日和見主義者は、實にその性質上、明確にして決定的な問題の置き方を、避けようとするものである。彼れは、一致しないところの、二つの見地の間を、鰻のやうにうねり歩く。彼れは、總ての側と『一致しよう』と試みるが、しかし小さな修正、疑問、正直にして無邪氣な希望等々にも、不一致的な見解を表明するものである。同志エトウアート・ベルンスタインのやうな日和見主義者は、綱領の問題に於ては、○○○な黨の綱領に、『一致する』ものであつて、彼れはまたおそらく、『根本的』な改革其のものを、要求するものであるが、而も其の場合彼れは、その改革を時代遲れの、目的に添はないものたらしめようとする。而してまた、その改革を、彼れは、『批評』(主としてブルヂョア民主々義の原則と標語からの、無批判な借り物であるところのもの)の『一般的原則』の說明ほどには、重大なものではないと考へる。同志フォルマーのやうな日和見主義者は、戰術の問題に於て、同樣に、○○○社會民主々義の古い戰術と一致し、同樣に、くだくだしい演說や、僅かな改正や、つまらぬ嘲笑に、自己をせばめ、決して、何

ら『組閣主義的』な戰術をとらない。而して、同志マルトフやアクセルロッドのやうな日和見主義者達は、組織問題に於て、今迄で同樣に、『規約の形式に於て規定』され得るところの、確定的な原則上のテーゼを、實際つくる必要があつたにも拘らず、何ら其れをつくつてゐないし、また彼等は、吾々の黨の組織規約の『根本的改正』を、確實に無條件に、希望するものであるが(『イスクラ』第五八號)、しかし彼等は、先づ第一には、『一般的組織問題』を取り扱ふことを、より好むやうである(何故かなれば、第一條にも拘らず、絕えず中央集權主義的な、吾々の規約の、眞に根本的な改正は、もし其れが、新『イスクラ』の精神に於てもくろまれるなら、不可避的に其れは、自治主義へ導かれてゆかなければならない。しかし無論、同志マルトフは、自治主義への自己の原則的傾向を承認しないであらうし、自身に於ても、決して認めないであらう)。それ故、彼れ等の『組織問題』に對する『原則的』な態度は、虹のやうに多くの色彩をおびてゐるものであつて、多くは、專制主義と官僚主義に關する、盲目的從屬に關する、また、螺旋と車輪とに關する、無邪氣で感慨的な演說となる——その演說の無邪氣なことは、實際の附加選擧の意味するところから、眞實の原則的意義を分けることが、實に全く困難に陷つたほどである。しかし吾々が、森の中に深く進み入れば、進み入るほど、益々森は、濃密になつてゆくものである。されば、厭

ふ可き『官僚主義』を分析し、正確な定義をくださうとする試みは、殘屑物の辯明にまで、クヴオステズムにまで、またジロンド主義者の空言虛語にまで、不可避的に導くものである。結局に於て、無政府主義の原則が、唯一の、實際に決定的な原則として、それ故また、實踐に於ては特に粗雜なものとなる原則（實踐は常に、理論に先行するのだ）として現れるのである。規律の愚弄視――自治主義――無政府主義…それが、我が組織問題に於ける日和見主義が、容易に降りたり、容易に登つたりするところの梯子段であつて、その梯子に於て、彼等は段から段へと飛び廻り、而も彼等の原則を、決定的に規定することを、巧妙に回避してゐる。(一)然るに、實際これと同樣な梯子が、綱領と戰術との問題に於ける日和見主義によつて、明かにつくられてゐるのだ。卽ち、『正統派』、正敎派、狹隘性及び不變性の愚弄――修正的『批評』と組閣主義――ブルヂヨア民主々義……これである。

(一)、規約第一條に就いての討論を想起する人々は、今や明白に、同志マルトフ及び同志アクセルロッドの、規約第一條に關する誤謬が、展開され深化される時は、必然的に、組織に於ける日和見主義にまで導くものであることを、認めるであらう。同志マルトフの根本觀念――何人も自身黨に加入出來るといふ――は、虛僞の『民主々義』以外の何ものでもなく、それは、黨の構造を、下から上へのものたらしめる觀念なのである。これに反して私の觀念は、黨を上から下へのものに、つまり黨大會から個々の黨組織へ行くものに、構成するところのもので、その限りに於ては、『官僚主義』

である。第一條に關する討論の中には、既に何も彼もが、卽ちブルヂヨア智識階級の心理や、無政府主義の空言虛語や、日和見主義的クヴオステズム的深慮やが、現はされてゐる。同志マルトフは、新『イスクラ』に於て開始されたところの『思想的な仕事』に就いて、『攻圍狀態』の中で(二〇頁)論じてゐる。それは、彼れとアクセルロッドが、第一條を發端となして、新しい方向に思想を實際導いてゐる限りは、正當なことである。然るに、この方向なるものが、『日和見主義』であるといふことは、單に有害なことであるに過ぎない。かの仕事が、この方向に進めば進むほど、かの仕事が、附加選擧のくだらない不平から解放されゝばされるほど、益々深く、それは沼澤(ズンプ)の中に落ち込むであらう。同志プレハノフは、黨大會に於て、既にそのことを明瞭に見て取つてゐたので、『何をなす可からざるか』といふ論文の中で、更らにまた次のやうに警告なしてゐる。卽ち、彼れは、彼等を附加選擧する用意あるもので、單に日和見主義と無政府主義とにだけ導くところの道を行く可きではないと――マルトフとアクセルロッドは、しかしこのよい警告を聞かなかつたのである。何故であるか？　吾々は、このやうな道を行く可きではないのか？　附加選擧をすることが、くだらない不平を云ふことにほかならないといふことで、吾々は、レエニンに贊同す可きであるか？　決してさうではない！　吾々は、吾々が原則を確保してゐる人間であることを、彼れに示すであらう！――して、彼等はそれを私に示した。否、總ての人々に、彼等の持つ新原則なるものが、日和見主義の原則にほかならないといふことを、明瞭に示してくれたのであつた。

一般的には、總ての近代日和見主義者の全著作の中に、特殊的には、我が國の少數派の全著作の中に、鳴り響いてゐるところの、間斷なき長くひかれた苦惱の音色は、規律に對する嫌惡との密接な心理的結合を、意味してゐるものである。彼等は、自分が迫害され、うとんじられ、投げ出され、追ひこくられてゐることを感知してゐる。而して、このやうな短い言葉の中には、親切

にして機智に富める洒落語の創說者が、被搾取者と搾取者に就いて、幸ひ憶測なした以上に、より多くの心理的及び政治的眞理を含んでゐる。實際に於て、吾々が、黨大會の議事錄を手にすれば、如何なる時でも如何なる場合でも、(一)我が○○○社會民主々義によつて惱まされたところの少數派が、明かに苦悶の上にあつたことが判るであらう。謂はゞ、ブンド派や[24]『ラボーチエ、デエロ』の人々が、其れであつて、吾々は黨大會から退去せしむるに至つたほど、彼等を强烈に苦しめた。また、一般的には組織の、特殊的には彼等自身の窒息によつて、致命的な苦惱を與へられたところのものには、『ユチーニ・ラボーチイ』の人々がある。規約的なものを取り上げて、いつも苦しめられてゐたところのものには、同志マコフがゐる（何故かなれば、彼れはいつも規約的には、馬鹿にされるやうなことを云つてゐたので）。また最後に、規約第一條に關する『日和見主義の誤れる非難』によつて、それから選擧の敗北によつて、惱まされたところのものには、同志マルトフと同志アクセルロッドがゐる。而して總てこのやうに痛ましくも苦惱したといふことは、實に多くの凡俗主義者共が今猶ほ考へてゐるがやうに、不都合な洒落、粗暴な突擊、烈しい論戰、門戶閉鎖、拳固の振舞等の、偶然の結果ではなくして、其れは『イスクラ』の三ケ年に亘る全體の思想的仕事の、不可避的政治的結果であつたのである。もし吾々が、この三ケ年の行程に於て、單

に無駄骨折りをしないで、行動の中に移されなければならないところの確信を、發表して來たのであるなら、吾々は、黨大會に於ては、反イスクラ及び沼澤（ボツグ）と闘ふよりほかはあり得なかつたのである。しかしながら吾々が、公然と假面をつけて、第一線に於て闘つた同志マルトフと一緒になつて、このやうに多くの人々を惱ました時、酒盃を溢れるなど滿す爲めには、猶ほ吾々には、ほんの少しばかり、ほんの僅か、同志アクセルロッドとマルトフとを苦しめることが、取り殘されてゐたに過ぎない。かくて、量は質への變化をとげてゐる。否定の否定が招來される。されば、總てこの惱まされた人々は、意見の相違を忘れ、お互の腕の中に身を投げ合つて泣き、而も『レエニン主義に對する○○』の旗を、押し立てたのである。(二)

(一)、ロシヤに於ける洒落語（Wortspiel）とは、譯しがたき言葉であつて、『不具者の虎使』といふことと、『口の中に飛び込む』といふことを、同時に意味するものである（獨逸譯者の註）。

(二)、この驚嘆す可き表現は、『攻圍狀態』（六八頁）に於ける、同志マルトフの言葉である。同志マルトフは、何より私に對しての『暴動』を起す爲めに、その時期の熟するのを待つてゐた。彼れは拙ない論客ではある。御愛想をふりまくことによつて、自己の敵手を滅さうとしたところの者は、彼れ、マルトフである。

その暴動がもし、反動主義者に對する進步的分子の對抗であるなら、其れは立派なものである。また、日和見主義翼に對する○○○○的翼の對抗であるなら、其れは妥當なものである。しかし、

○○○○の翼に對する日和主義翼の對抗である限り、其れは妥當なものだとは云へないのである。

（以下はアメリカ版英譯による）――譯者

勞働者十人が、自身を黨員だと稱さないことは（眞の勞働者は、名稱を求めない）、一人の法螺吹きが、黨員たる權利と機會とを持つといふことにもまして、より正當なことである。

（一九〇三年、黨の第二回評議大會に於ける演說から）。

何ら黨組織に屬してゐないところの個人を、黨員として認めることは、黨の全統制に反することを意味する。因みに、マルトフは、『イスクラ』の原則とは、全然矛盾するところの、新しい原則を取り入れてゐる。マルトフの草案說明の樣式は、黨の限界を擴大してゐるものである。彼れは、吾々の黨が、大衆の黨でなければならないといふことを、論證するけれど、彼れはあらゆる日和見主義者達に對して、大いに扉を開放し、黨の限界を充分なる範圍にまで擴大してゐるのである。

現在の情勢の下に於ては、○○○とくだらない講談師との間の、境界線をひくことが、非常に困難であるが故に、このことは一大危險を示す。つまり其れが、吾々が黨の概念を、より狹隘なものたらしめなければならない理由である。マルトフの誤謬は、評議大會に出席したこれ等の實に三分ノ一の人間が、單に厄介者であつたといふことを知つた時にも、而もその通りがかりの者に等しいあらゆる人間達に對して、扉を開けひろげたといふことである。されば、この場合、マルトフは日和見主義を曝露したのであつた。彼れの說明樣式は、規約の中に誤れる註釋を取り入れた、卽ち總ての黨員は、一組織の統制の下にあつて、中央委員會が、總ての個々の黨員に、接近を保つことが出來るがやうなものでなければならないとするのである。

然るに、私の說明樣式は、組織するといふことに對して、一の刺戟を與へたものである。

（一九〇三年在外革命社會民主黨の聯盟の第十一回評議大會の演說から）

七、組織問題に於ける日和見主義

（一九〇四年『一歩前進二歩退却』から）

プロレタリアは、權力の爲めの鬪爭に於ては、組織以外に他の武器を持たない。資本家社會に於ける、無政府的競爭の支配によつて非組織化され、資本家の爲めに强ひられた勞働によつて抑壓され、不斷に、あますところなき貧困や無智や墮落の『深み』に押しやられるプロレタリアートは、一の不撓不屈な力となり得るし、また不可避的にさうなるであらう。何故かなれば、マルクス主義の原理によつて創造されたプロレタリアートの智的團結は、幾百萬の勞役者達を、勞働階級軍の中にくり入れるところの組織の有形的團結によつて、强固にされてゐるからである。ロシヤ專制政治の老衰せる支配も、國際資本主義の老朽せる支配も共に、この軍隊と對抗することは出來ないであらう。この軍隊は、ジツク、ザツクの道と退却とに拘らず、現代社會民主々義のジロンド主義者の日和見主義的空言虐語にも拘らず、陳腐な研究會主義のすばらしい自己滿足にも拘

らず、また、知識階級無政府主義の華やかさと騷がしさにも拘らず、層一層密接に、それの隊伍を結合してゆくであらう。

八、プロレタリアの自己指導者訓練の理由

運動を組織し、其れを指導する能力ある、政治的指導者及び代辯者を、前方に押しやることなしに、○○を獲得したところの階級は、歴史上たゞの一つもない。

（一九〇〇年十二月の『イスクラ』第一號の『我が運動の緊急な仕事』といふ表題の論文）

吾々の運動の『物質的要素』は、一八九八年以來、驚くほどな成長を遂げたが、意識的な指導者達（社會民主々義者）は、この成長の背後にひきずられてゐた。このことがつまり、ロシヤの社會民主々義が、今日經驗しつゝあるところの恐慌に對する、第一の理由である。大衆の（自然發生的な）運動は、あらゆる動搖性に對抗することが出來るやうな、理論的に充分に訓練された『思想家』を缺いてゐたし、其れはまた、新しい運動の基礎の上に、戰鬪的な政黨を樹立するのに要した廣い政治的展望や、○○○精力や、組織的能力を有する指導者を缺いてゐたのである。

（一九〇一年十二月六日の『イスクラ』第十二號、『經濟主義者との一對話』）

全體としての黨は、中央に於て活動するのに適當な人々を、それ自身の隊伍の中から、組織的に且つ不斷に訓練しなければならない。即ち、其れは、この部署の爲めの總ての候補者の全活動を、あだかも掌中に見るがやうに、明白に、觀察しなければならない。即ち其れは、彼等の個人的特質を、彼等の弱點と强味を、彼等の得手と不得手を、よく知つておかなければならない。

（一九〇三年十一月二十五日、『イスクラ』に對する手紙の中で）

生涯のうち、或る時期に於て、何ら失敗を經驗しなかつた政治的勞働者といふものは、たゞの一人もない。されば吾々が、大衆に及ぼす影響に就いて、即ち大衆の『好意』の獲得に就いて、眞劍に論じようと欲するなら、吾々は、研究會及び團體の無力な雰圍氣の中に、これ等の失敗を押しかくさないやうな、あらゆる努力を示さなければならない。即ち、これ等の失敗は總ての人々の批判に、持ち出されなければならないのだ。しかし一見しては、このやうなことは、正當なものではなく、總ての指導者達に、『憤怒』を與へるものであると考へられるであらう。この正當なものではないといふ誤れる考へは、克服されなければならない。其れを克服することは、黨に對する吾々の義務であり、また、勞働階級に對する吾々の義務である。而して、このことによ

つて、啻にこのことによつてのみ、吾々は、有力な黨勞働者全大衆（偶然選ばれた團體や研究會ではない）に、彼等の指導者を見出し、それ等の人々を各〻、適所に置くことが出來るやうにするであらう。たゞ廣く公開することのみが、剛直な一面を持つ、出來心からの總ての過誤を、匡正するであらう。このことのみが、時にくだらない、そしてつまらない『反對』や『小團體』なるものを、黨の自己訓練の爲めに、有用で而も必要な材料に轉化するであらう。

明るくせよ、もつと明るくせよ！　吾々は、巨大なオーケストラをやらなければならないのだ。種々な役割を、適當に割りあて、或る者には感傷的なヴアイオリンを與へ、他のものには烈しい二重低音の役を、三人目には指揮者の鞭を與へ得る爲めに、吾々は經驗を持たなければならないのである。吾々をして、黨機關紙の紙面と總ての黨出版物に於ける、總ての意見を優遇せよといふ著者の哀訴に答へしめよ。吾々及び總ての人々をして、『音調』が尖鋭的であつたか、平面的であつたか、破調的であつたかといふ問題に就いての、吾々の『論戰と論爭』を批判せしめよ。このやうな公開の討論が、幾度も續行された後にのみ、指導者達に、眞に調子がよく一致してゐる合奏を、習得せしめることが出來るであらう。而してこれが遂行された曉にのみ、勞働者達は、吾々を正しく理解することの出來る一地位に置き得るであらう。たゞかくすることに於てのみ、

吾々の『總參謀本部』は、軍隊の正しい自覺ある意志にたよることが出來るのだし、同時にまた、軍隊は、總參謀本部の指導に從ひ、總參謀本部を動かすであらう。

（一九〇三年十一月二十五日、『イスクラ』への手紙）。

吾々は、閑暇の時間のみではなく、生活の全體を、〇〇に捧げるところの人々を、養成しなければならない。吾々は、吾々の仕事の種々な形態に、嚴密な分業を取り入れることが出來るやうになる爲めには、充分に大きな一組織を設けなければならない。

（一九〇〇年十二月、『イスクラ』第一號の論文、『吾々の運動の緊急な仕事』）。

大衆は、鬪爭の指導者達を、智的勞働者をも知識階級をも共に、自己訓練をするやうに、吾々が援助するまでは、決して政治的鬪爭を行ふことを、學ばないであらう。而も、これ等の指導者達は、吾々の政治生活の總ての局面を、それから、種々な理由の爲めに、種々な階級によつて行はれた抗議と戰鬪の總ての企てを、毎日組織立てゝ研究することによつてのみ、このやうな訓練を、獲得することが出來るのである。

（一九〇二年『何をなす可きか』）。

○ 政治は、一の科學であり、また、天から降下したのでもなく、無報酬的に求め得られたのでもない一の藝術である。……もしプロレタリアートが、ブルヂョアジーを打破しようと欲するなら、彼等は、ブルヂョア政治家に對して、決して劣らない、自身のプロレタリア『階級政治家』を、彼等の隊伍の中から、訓練しなければならないのである。

（一九二〇年『左翼小兒病』）。

九、吾々は○○を組織すべきか

（一九〇五年二月八日の『ウペルヨット』第七號）

……十四ケ月が、經過してゐる。[5] メンシエヴイキによる黨の仕事の非組織化と、彼等のお說教の日和見主義的特質とは、全く明白になつてゐる。一九〇五年一月九日には。プロレタリアートの○○○精力が、非常に莫大に貯藏されてゐたことと、社會民主々義者の組織が、非常に不充分なものであつたこととが、曝露されてゐる。バルフウス[26]は、その理解を持つてゐるものだ。『イスクラ』第八五號に於て、彼れは、新『イスクラ』の日和見主義の新觀念から、完全に方向轉換をなし、○○○な舊『イスクラ』の觀念に復歸することを、眞實意味するところの論文を發表してゐる。『そこに一人の英雄が現れた』と、パルフウスは、ガポンに就いて說いてゐる『しかしその時、政治的指導を缺いてゐたし、行動の綱領を缺いてゐた……』。『その時、組織を缺いてゐた爲めの悲劇的結果が、曝露された……』。『大衆は散亂し、團結は裂かれ、强固な中央部を缺き、指導的な行動の綱領を欲いてゐた。……』。『運動は、强固な指導的組織を缺いてゐた結果、

失敗に陥つた』。かくて、パルフウスは、吾々が『ウペルヨット』の第六號に於て、既に注目したところの標語――『〇〇の組織立て』を提唱する。彼れ、パルフウスは、〇〇教訓の影響下に於て、『現在の政治的情勢の下に於ては、吾々は、この數百千の人々を組織することは出來ない』といふ確信にまで到達してゐる（彼れは、〇〇を準備してゐるところの、大衆に就いて語つてゐるものだ）。『しかしながら吾々は』と、彼れが『何をなすべきか』の書物の中から、昔の思想を繰り返し述べてゐるのは、もつともなことである『吾々は、一の組織を、卽ち結合の母體となることが出來、而して〇〇のモメントに於ては、この數百千人を、周圍に取り集めることが出來るところのものを、創造することが出來る』。『吾々は、〇〇の間は大衆を取り集む可く、また、一定の標語の上に、〇〇を起す可く、大衆を〇〇の爲めに準備するところの、明瞭に描かれた任務を與へて、勞働者の集團を、組織立てなければならないであらう』

最後に！、と、吾々は、新『イスクラ』の塵埃の爲めに埋れてゐたところの、この昔の正しい思想を讀んだ時、氣輕に云つてのけるものだ。最後に、プロレタリア黨の勞働者の〇〇〇本能は、たとへ一時的であつたとしても、『ラボーチエ・ヂエロ』の日和見主義に對して、支配を勝ち取つてゐた。かくて最後に、〇〇の遙か後方に、卑怯な落伍をしない、而も〇〇に於ける前衛を支持

することの任務に就いて、恐れるところなく說くところの、一社會民主々義者の聲を、吾々は聞くのである。

新『イスクラ』に於ける人々は、勿論、パルフウスを正當だと見ることは出來なかつた。『同志パルフウスが發表したところの、總ての思想が、「イスクラ」の編輯局によつて分たれてはゐないであらう』と、編輯後記に於て述べられてゐる。

確かにだ！　まる一年半に亘る日和見主義的な空論を正面から唱へてゐる』ところの思想を、彼等がどうして『分たう』か！

『〇〇の組織立て！』。しかしながら吾々は、〇〇が社會的關係の變革によつて、呼び起されるのであらうが、その〇〇は、足場を持つことが出來ないであらうといふことを、知らうとするところの賢明なる同志マルチノフを、確かに持つ。マルチノフは、パルフウスに彼れの誤謬を明白にし、而も、パルフウスがたとへ、革命に於ける前衛の組織を自身觀察してゐるとしても、其れは『狹い』危險なジヤコビン主義的な觀念であるといふことを、證明するものである。而して、其れにとゞまらない。我が賢明なマルチノフは、親愛なマルトフを盲從せしめるのである。彼れの師宗を、猶ほより多く深めることの出來る『〇〇の組織立て』といふ標語を全く、『〇〇の離散』とい

ふ標語によつて、置き代へることの出來るところの彼れ、マルトフをである（第八五號參照）。……。

……しかしながら最も見事だつたのは、武裝といふことに關する、『イスクラ』の考察である。『プロレタリアートの○○、つまり支配に對する人民の○○○○○を、保證し得るところの、組織の系統立てる建造の仕事』は『技術的』な(!?)任務だとまで確言されてゐる。吾々は勿論、劣等な技術を高めて、事物の深みを觀察する。『其れ（「技術的」な任務）は、非常に重要なものではあるが、○○の爲めに、大衆を準備する吾々の仕事の重要性は、そのことの中にはないのである……』

『○○○組織の總ての努力は、其れがもし、○○○○○○○○○○、○○○○○○であることを、つまり專制主義を、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○す可きであることを、理解してゐないならば、何等の意義をも存在せしめないであらう。かくて吾吾は、吾々の努力をば――大衆○○○的の爲めの自己○○の宣傳、そのことに向けなければならないのである（最後の二ケ所は、筆者の圏點）。

然り、然り、其れは、問題の實際に深い把握であつて、狹隘に、殆ど『ジャコビン主義的』になつたパルフウスのもの以外の、全く他の何かである。非常に重要なことは○○の仕事にあるのではなく、また○○の系統立てた準備にあるのでもなくして、○○の、而も自己○○の、灼熱的な要求を以て、民衆を○○○せしむることにあるのである。吾々の同志は、吾々の運動を後方に押しやらうとする、この凡俗的な煩瑣を見て、如何に社會民主々義に對する灼熱的な羞恥心を感ずることか？　○○○○○○○○○○○、○○○○○○させることは、社會民主々義の一般的にして永久不變な、非常に大切な任務であり、○○に於ても、イギリスに於ても、獨逸に於ても、イタリイに於ても、同樣の割合に於て、應用されるところのものである。壓迫され且つ搾取に對して闘つてゐる階級が、存在するところでは何處でも、彼等は、常に最初から社會主義の宣傳によつて、それから何よりも第一に、○○○○○○○○、○○○をなすであらうし、またこのやうな『要求』は、勞働運動が開始されるや否や、既に存在するのである。しかし社會民主々義者は、この灼熱的な要求を、たゞ意識の中に取り入れるに過ぎないものであつて、また、其れを感知してゐる人々に、單に、組織と計畫的行動の必須なこと、即ち全體としての政治的闘聯に注目することを敎へようとするものだ。願はくば、『イスクラ』の編輯局の諸君、諸君は、お氣に入りの獨逸の勞働者會議を、觀察して見たまへ。諸君は、彼等の顏色が――おそ

らく○○に對して――如何に憎惡に燃え、如何に憤激的な皮肉を刺戟し、如何に拳固をかためるか判明するであらう。民衆を嘲弄するブルヂョアジーとその從僕共を、速かに○○せんとする、この灼熱的な要求は、如何なる力を包有してゐるか？　組織と規律との力、意識の力――そして個人的○○は無意味だといふ、眞劍な○○○民衆鬪爭の時期は、まだつくられてゐないといふ、それから適當な政治的情勢が缺けてゐるといふ意識の力を、其れは包有してゐる。このやうな根據から、このやうな事情の下に於て、社會主義者は民衆に向つては、汝を○○せよと、說きもしなかつたし――また決して說きもしないで――彼れは無條件にそして常に（さもなければ彼れは、何ら社會主義者ではなくして、一の饒舌家である）、○○し且つ敵を打破する灼熱的な要求を以て民衆に○○○○をさせるのである。眞實、日常の仕事をかく條件づけることは、ロシヤに於ける今日の事情が、異れるものだからだ。全くそれ故に、今までは決して○○といふことを唱へなかつたが、しかし常に、勞働者を、○○の灼熱的要求を以て、○○○○をせしめた○○○社會民主々義者達は、今や實に、○○○勞働者の發案によつて、○○へ〳〵、といふ標語を持ち出してゐる。而してこの標語が遂に持ち出されたその時、『イスクラ』は、問題の重心は○○することにあるのではなくして、自己○○に對する灼熱的な要求にあるのだと、神託に述べたのである。其れは、

知識階級的な生命のない理論づけではないか？　實際このやうな連中は、○○○な前衞の緊急任務から、プロレタリアートの『背面』の觀察へと、黨を後方に引込むものではないか？　吾々の任務をこのやうに驚くほど無意味なものにしたことは、あらゆる利巧ぶり家共の個人的特性・依存するのではなくして、過程としての組織、過程としての戰術といふ、流行語に於て、非常に堂々と述べてゐるところの、彼等の全體の態度に依存するのである。確かに、この態度は、人に、彼れがたゞ、あらゆる明確な標語に尻込みなし、あらゆる『計畫』に恐れをなし、また大膽不敵な○○發案に近寄れずにはねのけられ、理屈をこね且つ古い無意味なことを繰り返し、而も、吾々社會民主々義者が明白にプロレタリアートの○○○行動の背後に取り殘されるに至る時代へ――突き進むことに、恐怖をいだくものであるといふことを、必然的にもまた不可避的に、宣言しなければならないのだ。實に、死者が生者に抱きつく。『ラボーチエ・デエロ』[4]の死せる理論は、新『イスクラ』をまた、無希望に滅してしまつたのである……。

十、黨の再組織に關して

（一九〇五年十一月十日と十五日の『ノオヴアヤ・ジズニ』第九號と第十三號）

吾々の黨の爲めの仕事は、根本的な點に於て異つてゐる。集會の自由、團結の自由、出版の自由が、獲得されてゐる。勿論これ等の權利は、少しも保證はされてゐないのであつて、この現存の自由に、信頼するといふことは、罪惡でないとしても、狂氣の沙汰である。而も猶ほ決定的な鬪爭が、生ずるであらうし、またこの鬪爭の爲めの準備が、先づ第一に起されなければならない。黨の○○○○○○が、保持されなければならない。しかしながらそれと同時に、現在の比較的廣汎な活動地域を、最も大規模に利用することが、絶對的に必要である。また、○○○○○○のほかに、常に新しい、○○○○○○○○○○○○（而して黨に所屬する）、組織を創造することが絶對に必要である。この最後の仕事なしには、吾々の行動を、新しい情勢に適合させ、且つまた、新しい問題の解決を、可能にすることは、考へ得られないのである。

組織を新しい基礎の上に置く爲めには、新しい黨大會を、必要とするものである。規約によれば、黨大會は、毎年一回開かれることになつてゐるのであつて、一九〇六年五月に決定してゐるが、今や、それを早めることが必要である。もし吾々が一刻も早くしないならば、吾々は時期を逸するであらう——勞働者によつて、非常に元氣に感知されてゐる、組織の必要が、奇怪な恐る可き形態を取り、『自主』の傾向を強めるであらう、等々といふ意味に於て。かくて、吾々は新たな組織立てを、急がなければならないし、また『新しき進路』を、勇敢に斷然定めなければならないのである。

本號に發表になつた、而も吾々の黨の中央委員會によつて起草されたところの、黨に對する指令は[28]、私の深い確信によれば、この新しい進路を、全く正しく決定してゐる。吾々○○○社會民主黨の代表者達、吾々『多數派』の同志達は、黨を全く完全に民主々義化することが、○○○な仕事を條件とする以上、不可能であるといふこと、それから『選擧主義』は、そのやうな事情の下に於ては、一の空言虛語に終ることを、再三唱へて來てゐるものである。而して實際が、吾々の言葉を確證してゐる。また、文獻に於て（アクセルロッドの序文のついた『勞働者』といふ小冊子と、『イスクラ』及び『黨分裂に對する勞働者』といふ小冊子に於ける『多數の中の一人たる一勞働者』の手紙を見よ）[29]は、少數派の以前の連中によつて既に、實際的にして熱心な民主々義

化が、即ち事實上は當選主義の達成といふことが、實際に於て成功してゐないといふことが、再三高唱されてゐるのである。しかしながら、政治的自由への推移に際して、新しい情勢の下に於ける選擧主義への推移が、必須なものとされることは、吾々ボルシエヴイキによつて、常に承認されて來てゐる。もしその證據が、必要だとあるなら、ロシヤ社會民主勞働黨の第三回黨大會の[30]議事錄は、そのことを特に明確に證明してゐるのである。

斯くて任務は、明白であつて、○○○○は、當分の間は保持されなければならないし、また其れは、より新しいより公然なものに、展開されなければならないのだ。黨大會に對する適用に於ては、この任務（その具體的な遂行の爲めには、勿論實際的能力と、地方的時間的あらゆる關係に就いての認識とを必要とする）は、次のやうな內容のものである。即ち、第四回黨大會が、規約を基礎として召集さる可きであり、同時にまた、即時即刻に、選擧主義の適用を以て、開始さる可きであるといふのである。中央委員會は、この任務を實行し、委員達は、正當に採決された投票によつて――形式的には、全權をゆだねられた組織の代表者として、實際的には、黨の繼承團體の代表者として、黨大會に出席したのであつた。總ての黨員の、それ故また、黨に所屬する勞働者大衆の、選出した代議員達は、中央委員會によつて、その權利に基き、協議投票に召喚された。中央委員會は猶ほ其の上、黨大會に於ては、この協議投票を決議投票に變更す可きであると、即時に提議されることを、宣言したのであつた。

吾々の黨は、地下（非合法性）の中に、あまりに長期間とゞまつてゐた。第三回の黨大會の一代議員が、全く正當に述べたやうに、黨は、近年の經過では、地下に於て呼吸困難を感じてゐた。然るに地下は、崩壞してしまつたのだ。それ故今や、勇敢に前進せよ、新しい○○を取れ、其れを新しい人々に割り當てよ、汝等の支點を擴大せよ、總ての勞働者社會民主々義者を、汝等の手近に召集せよ、一連の黨組織に、彼等を數百人數千人取り入れよ、と云はなければならない。また、彼等の代表者達をして、一連の我が中央部を、活氣づけしむるがよいし、彼等を通じて、若き○○○ロシヤの淸新な精神を、注入せしむるがよい。今日に至るまで、○○○、マルクス主義の合理論的根據を、社會民主々義の總ての本質的な標語を、正しいものとして立證して來た。而も○○はまた、吾々の仕事、即ち社會民主黨の仕事が正しかつたことを立證したし、プロレタリアートの眞實の○○意志に對する、吾々の希望と信賴が、正しかつたことを立證した。斯くて吾々は、黨の必須な改革に際しては、總ての瑣事を撤回するであらうし、新しき進路に一歩踏みのぼるであらう。そのことは、吾々をして吾々の古き○○○○○を、採用させないものである（勞働者社

會民主々義者によつて、其れが承認され、確證されてゐることは、疑ふ可からざることであつて、生活と○○の任務とによつても、總ての決議決定が、其れを證明し得る以上に、百倍も力强く其れは證明されてゐる)。しかしまたそのことは、吾々に、新しい若い力を與へるものである。卽ち、ロシヤの爲めに自由の半ばを、獲得したところの、猶ほ完全な自由を獲得し、その自由を通じて、ロシヤを社會主義へ導くであらうところの、唯一の眞に○○○な、完全に○○○な階級の最も深い深みから出て來る力を、吾々に與へるものである。

『ノオヴアヤ・ジズニ』第九號に發表されたところの、ロシヤ社會民主勞働黨の第四回黨大會召集に關する吾々の黨中央委員會の決議は、黨組織の民主々義的原則の完全なる實現の爲めに決定的な一歩を進めるものだ。黨大會への代議員の選擧(最初は協議投票を以て現れるが、次ぎには疑ひもなく決議投票を行ふところの)は、一ケ月間に着手されなければならないであらう。かゝるが故に、總ての黨組織では、出來るだけ敏速に、候補者の人格と黨大會の任務とに關する、問題の討究を、行はなければならない。死滅にある專制主義が、約束した自由を取り消し、○○○勞働者及び特にその指導者を、襲擊せんとする新しい企ての可能性を、絕對に考慮に入れなければならない。故に、代議員の實際の名前を公表するといふことは、困難を生ずることである(精

精特別な場合を除く外は)。黑百人組が勢力を保持する限り、吾々が政治的奴隸制の時代に於て、その適用を徹底的に學んだところの變名を、放棄することはまだ出來ないであらう。代議員の爲めに――更らに古き語法に從へば、『揚棄の場合の爲めに――補缺候補者を選出するといふことは、また不要なことではないのである。しかしながら吾々は、總てこのやうな○○○な豫防策的な名前に、とどまるものではない。何となれば、地方的な仕事の條件に通じてゐる同志は、この點に於て生起し得るところの、總ての困難を、容易に解決するであらうから。專制主義の下に於ける、○○○な仕事に於て、豐かな經驗を積んでゐる同志は、彼れ等の勸告によつて、新『自由』(この言葉に、當分引用符を附する)の情勢の下に於て、社會民主々義的な仕事を開始するところの、總ての人々に、助力を與へなければならない。この際、吾々の委員會の會員の側に於ては、多くの思慮分別を要するものであることは、自ら理解されることであつて、謂はゞ、以前の形式的な特權なるものは、今や、不可避的にその意義を失ひ、而も殆ど一般的に新たに『最初から』始めること、黨の新しい同志の廣汎な層に、決定的な社會民主々義的綱領の非常な重要性及び、丁度それと同樣に非常な重要性を持つ戰術と組織を明示することが必要である。吾々は、今まであまりにも屢々、交渉のある社會層から分離して來てゐるところの、○○○達とのみ行動を共に

して來てゐたが、今や吾々が、大衆の典型的な代表者達と、行動を共にするものであるといふことを、忘れるものではない。而してこのやうな變化は、單に宣傳及び煽動に於ける方法の變化（一の問題の說明に於けるより偉大な通俗性の必要と熟練、卽ち最も單純な、最も平易な、而も實際に確信ある方法に於て、社會主義の根本眞理を說明する熟練の必要）のみではなく、また組織に於ける方法の變化をも必要とするものである。

この覺書の中で、私は新しい組織の任務の一側面を、布衍することが出來た。中央委員會の決議は、總ての黨組織の代議員をして、黨大會にまで招待し、而も總ての勞働者社會民主々義者をして、この組織の中に入り込ませることを要求した。この誠實な希望が、實際に實現されんが爲めには、勞働者の單なる『招待』や、昔の型の黨組織の數の、單なる增大では、充分ではないのである。否、總ての同志が、共同的に、獨立的に、また創造的に、新しい組織形態を完成することが必要である。しかしこゝであらかじめ、確定的な標準を提示することは、其れが總て完全に新しい仕事である故に、ゆるされないのだ。卽ちこゝでは、地方的な情勢の認識と、何よりも先づ總ての黨員のイニシヤチイヴの適用が、考へられなければならない。新しい組織形態、より正確に云へば、勞働黨の基礎的な組織細胞の新しい形態は、古い團體の形態よりも、絕對的により

廣汎なものでなければならない。猶ほそのほかに、新しい細胞は、非常に嚴密に形成されたものではなくして、『よりゆるやかな』組織であらねばならない。完全な團結の自由と、人民のブルヂヨア的權利の完全な確保とによつて、吾々は勿論一般に、社會民主々義的團結（單に勞働組合的團結のみではなく、また政黨の團結）を確立しなければならない。今日の事情の下に於ては、吾吾は、一般にその使用をゆるされてゐるところの、あらゆる手段、あらゆる方法によつて、この目標に近づくやうに、努力しなければならないのである。

吾々は、總ての黨員及び、社會民主黨に同感を持つところの、總ての勞働者の發言權を、卽刻喚起しなければならない。吾々は、ロシヤ社會民主勞働黨の第四回黨大會に就いて報告をなす爲めに、最も簡明で最も平易なかたちで、この黨大會の任務を說明する爲めに、また黨大會の組織形態を記述する爲めに、且つまた總ての社會民主々義者を、眞實プロレタリア的な社會民主黨を新しい基礎に於て仕上げる仕事に召集する爲めに、直ちに且つ一般に、講演會、相談會、集會、大衆的會合などを、組織しなければならない。このやうな仕事は、經驗の多くの指示を提供するであらう。其れは、二三週間のうちには（仕事が精力的に着手されるなら）、勞働者の中から、新しい社會民主々義的な力を、前面に押し進めるであらう。其れは、非常に多くの勞働者の層に於

て、吾々が今や、總ての勞働者同志諸君と共に、新たに建設せんと決定してゐるところの、社會民主黨に對する興味を、復活させるであらう。卽時に總ての會議に於て、黨の團體、組織、集團をつくらふといふ問題が、提出されるであらう。あらゆる團體、あらゆる組織、あらゆる集團は、直ちに、事務家、理事、或は事務擔當委員などを、選出するであらう。一言にして述ぶれば、組織事項を指導し、地方の黨制度に對する關係を協義し――黨の文書を受取り、其れを流布し、黨の仕事の爲めの寄附を集め、會議、講演、報告を計畫し、最後に黨大會への代議員の選擧を準備する任務を持つところの中央集權的獨立的團體を選出するであらう。黨の委員會は、勿論、あらゆるこのやうな組織が、援助を受け、而もロシヤ社會民主勞働黨とは、何であるか、其れは如何なる歷史を持つか、今や其れは、如何なる大きな任務をつかさどるかといふことを、明白ならしむるがやうな材料を供給するそのことの爲めに、配慮するものであるであらう。

更に、黨員の慰樂となるところの、料理場、喫茶場、ビヤホール、圖書館、讀書室、『テイル』(一)等々のかたちで、社會民主々義的な勞働者の組織の、所謂る地方的家政經濟的支點を創造するそのことの爲めに、また、配慮す可き時代である。されば吾々は、『專制主義的』の警察のほかに、また『專制主義的』な企業家共が、煽動家達の解職によつて、勞働者社會民主々義者を迫害する

ものであることを、忘れてはならないし、從つてまた、工場主の專橫から、出來るだけ獨立的なものであるところの、支點の設置が、非常に重要な事項であるといふことを、忘れてはならないのである。

(一)、私はロシヤ語に適當な言葉を知らない。それで「テイル」(Tir)『(Schiessbude)「射的場」といふやうな意味のもの』として用ひておく。それは、種々な武器が備へてあつて、望みの人は、僅かの料金で入場して、ピストルと小銃で標的を射ることが出來る一の射的場なのである。ロシヤに於ては、集會と團結の自由が、布告されてゐたのである。そして市民はまた、射的の練習に集まることをゆるされてゐた。しかしそのことがらは、何人にも別に危險を生じなかつた。吾々は、歐洲の總ての都會に於て、あらゆる人間に解放されてゐるこのテイルを見ることが出來る――地下室に、時たまは郊外等々に。そしてそれは勞働者にとつて、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○。されば、もし團結の自由が確立され、吾々が、このやうな設備を閉鎖しようとする○○○○○、裁判に引き出すことが出來るなら、吾々は明かに先づより眞面目により廣汎に亙る方法に於て、このことにとりかゝることが出來るであらう。

吾々社會民主々義者達は一般に、あらゆる方法に於て、現在擴大されてゐる範圍の行動の自由を役立てなければならないのであつて、この自由が、より確實なものになればなるほど、吾々にはより精力的に、『民衆の中へ！』といふ標語を持ち出すであらう。今や、勞働者の發言權は、吾々昨日の○○や『集團人』には、決して一度も夢想されなかつたやうな規模に於て現れるであら

う。今や、プロレタリア大衆の上に、社會主義の觀念が働きかけるところの道は、吾々が屢〻全く、其れをたどり進み得ないがやうな、そのやうな道であり、またあるであらう。このやうな事情に應じて吾々は、社會民主々義的知識階級のより正當な振り當ての爲めに、注意を拂はなければならないものであつて、(一)それと共にまた、運動が既に確固たる足場を有してゐる場所、云ひ得べくんば、其れ自身の力を以て、目的を達することが出來る場所で、目的もなく逡巡させないやうにし――かくして仕事がより困難であり、條件がより困難な、經驗と知識に豐かな人々の缺乏がより大な、光明の源泉がより少い、政治的生活の鼓舞がより微弱であるところの、『深みへ』知識階級が行くことが出來るやうにしなければならない。『民衆の中へ』今や吾々は、平穩な僻村の總ての人民でさへも關與するところの選擧の場合の爲めにもまた行かなければならない――而して(これは遙かにより重要なことであるが)、地方王黨の反動的志向を、痲痺させる爲めの、それから偉大な中央部から出て行くところの、標語の流布を、あらゆる地方に於て、プロレタリアの全大衆の下に、確證する爲めの、公然たる鬪爭の場合の爲めにも、吾々は行かなければならないのである。

(一)、私は第三回黨大會に於て、黨委員會には、約、知識階級二人に對して、勞働者八人を參加させるがよいといふ希望を述べた。しかしこの希望は、なんて古ぼけたものだ。今や吾々は、新しい黨の組織にあつて、社會民主々義的知識階級の黨員一に對して、勞働者社會民主々義者何百人かを、參加せしむ可きであることを望まなければならないのである。

總て極端なことは、勿論、有害である。吾々は、完全に永續的な、出來るだけ『模範的』な仕方の組織立ての爲めに、今やまた、あらゆる重要な中心に、最善の力を集中させなければならない。經驗は、この點に於て、如何なる事情が、注目されなければならないかを、教へるであらう。かくて吾々の任務は、今や、新しい基礎に於ける組織化の爲めに　新しい規準を見出すこと、そのことの中に全然あるのではなく、寧ろ、第四回黨大會に對して、黨の經驗の記錄を、總括し公式化する爲めに、最も廣汎な、最も元氣ある仕事を展開させること、そのことの中にあるのである。

十一、組織問題

（一九〇八年の十二月協議會の決議から）

協議會は、次のやうに考察してゐる。

一、反革命の勝利が、たとへ現代に於ては、黨に對する一時的な無關心を、〇〇〇〇的な意味の下に喚起し、而も社會主義的關係に於ては意識するところの少い勞働者達の中に、其れを喚起してゐるとは云へ、それにも拘らず猶ほ黨は、爾來、出來るだけ廣汎な勞働大衆の下に於ける、政治的經濟的〇〇と組織立てられた仕事とを、より廣く展開する根本的任務を有してゐるものである。

二、黨の民主々義的な標語の實現を先へ押しやつたところの、この勝利は、主に〇〇の間近かな勝利の期待に於て、勞働運動に參加し來つたところの、總ての動搖不定な知識階級的及び小ブルヂョア的な分子を、一連の黨から放逐したものである。

三、變化された政治的事情は、合法的半合法的勞働者の組織圈内に於て、社會民主々義的な行動を、常により高き程度のものたらしめることが出來ない。

四、指導的黨制度を構成する人々は、常に層一層、〇〇の年月を通じて味はつた經驗の影響力に於て、階級意識を深めてゐるところの、プロレタリアートの意識的分子によつて、滿たされつゝあるものである。

五、現在に於ける仕事の條件は、組織の民主々義的な構造の原則の適用を、非常に廣汎には、不可能たらしめてゐるものである。

かゝるが故に、協議會は次のやうに考へてゐるのだ。

（イ）、黨はその特殊な目標を、大衆の下に於ける〇〇〇な、宣傳的なまた實際に組織的な仕事の爲めに、支點として役立つことの出來るところの、既に成立してゐる組織の確立と利用の上に、それから新しい非合法的な、半合法的〇〇〇な、且つ出來得るなら合法的な組織の建設の上に、例へば工場會議や、宣傳團體や、〇〇〇〇及び合法的勞働組合や、倶樂部や、種々な勞働者教育團體等等の上に、向けなければならない。これ等總ての仕事は、あらゆる産業部門に於て、少數であつても、純粹に黨派的な、大衆と密接に結合してゐるところの、勞働者委員會が存在してゐる時は、それから合法的な組織に於ける總ての仕事が、〇〇〇〇な黨組織の指導の下に立つ時は、その時

に限り、其れは可能でありまた效果を齎すことが出來るものである。

（ロ）、地方に於ける黨の仕事の統一の爲めには、次のやうなことが必要である。（a）、あらゆる地域に於て、地方組織に單に、技術的支持を示すのみではなく、またそれ等のものに、思想的指導で助力する、而も○○○○た場合には、補充の任にあたるところの、地方中央部なるものを組織すること。（b）、地方的及び地域的組織と、中央委員會との最も密接なる結合をつくり上げること。

（ハ）、地方組織の正規な而も中絶することのない職能の遂行を、確固たらしめることの爲めには、附加選擧の原則の私的適用が、許さる可きであるが、その際選出された會員は、先づ第一におそらく、規約に基づいて正當に選ばれてゐるところの同志によつて、置き代られなければならないであらう。「而して協議會が、組織の内容に就いて、どう考究してゐるかといふに、其れは、次のやうに考へてゐるものである。卽ち、黨の任務及びロシヤ議會のフラクションに關する決議の中に表示されてゐるところの、現在のモメントに聯關する政治的及び經濟的○○を除き、黨は、その特殊な目標を、黨勞働者の廣汎な範圍に於ける、社會民主々義的な世界觀の深化の上に、それから特には、勞働者大衆それ自身の中から、社會民主々義運動の實際的及び思想的指導者を養

成することの上に、向けなければならないものだといふことに。

十二、進出の途上

（一九〇九年二月の『ゾオチヤル、デモクラツト』第二號から）

分裂離散の一年、政治的な思想紛亂の一年、黨にとつて進路なき一年が、吾々の背後に横はつてゐる。黨の組織は總て、黨員の數を失ひ或るものは——眞實、極く少數のプロレタリアートから成立つてゐるものはいづれも——分裂離散してゐる。〇〇によつてつくられた、半ば公然の黨の制度は、他のもの（揚棄されてしまつてゐる。而して問題は、分裂離散によつて影響を受けてゐるところの、黨内部の或る分子にとつて、吾々が舊社會民主々義的な黨を維持す可きであるかどうか、そのことを續行す可きであるかどうか、再び吾々が〇〇運動に行く可きであるかどうか、而して如何にして其れをなす可きであるか、といふやうな問題が生じたほど、しかし廣汎なものとなつたのだ——而もこの問題に對して、極端に右翼的な分子は、あらゆる代價で、黨の綱領や戰術や組織などの公然の放棄といふ代價を以てさへ、合法化することを主張すべしと答へた（所謂る清算派運動なるもの）。この危機は疑ひなく、單に組織に於ける危機であつたばかりではなく

政治的思想の危機でもあつた。

ロシヤ社會民主勞働黨の最近開かれた全露協議會は、進出の途上に、黨を導き、而もそこに、反革命勝利以後の、ロシヤ勞働運動の發展の一轉換點を示したのであつた。吾々の黨の中央委員會によつて出版された、特殊な『報告』の中に、記載されてゐるところの協議會の決議は、[31] 中央委員會によつて是認されたので、從つて其れは、全體の黨の決議として、次ぎの黨大會まで見做す可きである。この決議の中には、危機の根據及び意義、並びにその克服の手段に就いての問題に對して、全く明確な答へが與へられてゐる。何となれば、吾々の組織は、協議會の決議の精神に於て活動し、而も總ての黨勞働者が、自ら黨の今日の任務を、明白に且つ充分に意識なし、彼等が、協力的にして活氣ある〇〇〇社會民主々義的勞働者に對して、彼等の力を强め結びつけることが出來るやうに、その爲めに努力するものであるからである。

黨に於ける危機の根本的原因は、組織に關する決議の動機に現れてゐる。この根本的原因は、ブルヂヨア民主々義的革命の間近かな勝利に對する期待に於て、主として勞働運動に參加したところの、而も反動の時代に於ては、確乎として殘存することの出來ないところの、動搖不定な知識階級と小ブルヂヨア分子から、勞働者黨を淨化したことの中にあるものである。理論の領域

(『○○○マルクス主義からの離反』)卽ち當面の緊急事に關する決議に於て、竝びに戰術の領域(『標語の截斷』)と、黨の組織に就いての政策の領域に於て、彼等の不確實性そのものは示されてゐる。かくて、明確な意識を有する勞働者は、この不確實性を拒否し、決定的に淸算派に抗爭し、黨の組織の事務を擔當し始め、またその指導を掌握することになつたのだ。もし吾々の黨のこの精鋭が、分裂離散と危機との要素を、一擊の下に克服することが出來なかつたとしても、其れはこの任務が、反革命の勝利の前では、重大なものであり、困難なものであつたからであるといふ理由だけではなくして、その思想は革命的○○○であつたが、しかし充分な社會主義的意識性には、達してゐなかつたところの勞働者の間にもまた、黨に對する無關心が、確かに示されてゐたからであるといふ理由からでもあつたのである。眞實、協議會の決議は、ロシヤの意識ある勞働者諸君に於いて、分裂離散を動搖不定の時代に對する鬪爭手段の爲めに招來された社會民主々義の見解として、先づ第一に批判してゐる。

ロシヤ議會フラクションに對する態度の問題は、戰術的一面と組織上の一面を持つてゐる。後者に關しては、ロシヤ議會フラクションに對する決議はまた、組織問題の批評に對する決議に於て、協議會によつて決定されたところの、組織政策の一般的原則の、特殊な場合に於ける新しい

一適用であるに過ぎない。而して、ロシヤ社會民主勞働黨內の、二つの基本的な潮流は、協議會によつて、この問題の中で決定された。卽ち○○○○組織に、重點を置くものと、他の——多かれ少かれ、淸算主義と同類な——合法的半合法的組織に、重點を置くものか。「今や當面の問題の特質は、吾々が既に述べたやうに、一定の數の勞働者諸君、特殊的には知識階級が、部分的にはしかしまた勞働者が、黨から脫退したといふことである。淸算派的運動の流れは、眞實、最善にして最も活動的な分子が、黨を脫退して、合法的な組織を、彼等の戰術の分野に於て選ぶ可きか、或は『動搖不定な知識階級的、小ブルヂョア的分子』が、黨を脫退す可きかどうか？　といふ問題を課すものである。」吾々は、協議會が後者の意味に於て、解答を與へ、而も淸算派を否決なし宣告したといふことは、述べる必要がないと考へる。黨の最大多數のプロレタリア分子、最も原則に忠實な分子「及び知識階級の最大多數の社會民主々義的分子などは、ロシヤ社會民主勞働黨に忠實にとどまつてゐるのだ。されば、その黨からの脫退といふことは、決して確實性のない黨員信用するに足らない仲間、それから、自らを常に、プロレタリアに一時的に結びつける、小プルヂョアと『階級落伍』とから現れる『同伴者』、卽ち、一定のあらゆる階級の領域から、見切りをつけられたところの人々などからの、黨の解放と淨化とを意味するものである。

黨組織の原則に關する評價は、自然と、協議會によつて採用されたところの、組織政策の規準に導く。○○○○な黨組織を強大ならしめること、活動のあらゆる分野に於て、黨細胞を創造すること、就中、『數に於て豐かでないとしても、純粋に黨派的な、勞働者委員會を、あらゆる產業的企業の中に』創造すること、勞働者諸君の間に見られる、社會民主々義的な運動の、指導者の手中に、指導的職能を中央集權化すること——それが、つまり當面の任務なのである。而して、『大衆との密接な結合』を、眞に維持せんが爲めに、それから大衆のあらゆる要求に、社會民主々義者が反應するがやうな、そのやうな傾向を、仕事に與へる爲めに、あらゆる半合法的な、出來るならまた合法的な組織を、利用するといふことは、其れは明かに、細胞及び委員會の任務であらねばならない。あらゆる細胞及びあらゆる勞働者の黨委員會は、『大衆の下に於ける、煽動的、宣傳的、組織的仕事の爲めの支點』であらねばならない。卽ち、それ等のものは、大衆の行くところには、無條件に行くものであり、一歩々々大衆の意識を、社會主義への方向に押しやることに努力するものであり、あらゆる部分的な問題を、プロレタリアートの一般的任務に結びつけることに努力するものであり、あらゆる組織上の企圖を、階級團結に關する事項に、變更することにつとめるものであり、その精力、その思想的影響により（しかし肩書や身分によらないのは、勿論の

こと）、全プロレタリアートの合法的組織の中に、指導的役割を獲得せんと努力するものである。このやうな細胞と委員會とは、屢々その數に於ては、全く無力であるかも知れない。——しかしそれ故、其れは、黨の傳說の羈絆と黨の組織とによつて、明確な階級的綱領によつて結合されるもので、從つて、二三の社會民主々義者黨員を、無形態な合法的組織に、解け込むことをまぬかれしむることが出來るし、あらゆる關係、あらゆる事情の下に於て、黨の方針を最も可能な狀態に突き進め、全體としての黨の精神に於て、環境に影響を及ぼすことが出來、而も、環境によつて、自らを呑み込まれるやうなことをさせないものである。

十三、清算主義の清算

(一九〇九年七月の『プロレタリイ』第四六號)

おそらく一九〇七年六月三日のクーデターに始まり、現在の時期に至るまでの、最近の二ケ年は、ロシヤ革命の歴史の中で、及びロシヤ勞働運動とロシヤ社會民主勞働黨の發展に於て、鋭い轉換の時代及び困難な恐慌の時代を示してゐる。ロシヤ社會民主勞働黨の全國協議會は、一九〇八年十二月に、現時の政治的情勢、革命運動の狀況とその展望、現在の時期に於ける勞働階級黨の任務の問題に、總決算を行つてゐる。この協議會の決議は、黨の强固なる占有物であつて、而もこの決議に對して、無條件的に批評を加へようと欲したところの、メンシエヴイキ及び日和見主義者は、たゞ單に、彼等の『批評』の無力さを、特に露骨に曝露したものであつた。實にその批評たるやこの決議の中で決定されたところの問題に於て、何ら合理的なもの、統一的なもの、組織的なものを、全然表示することが出來なかつたのである。

しかしながら黨協議會は、吾々に猶より多くのものを與へてゐる。其れは黨の生活に於て、二

つのフラクシヨンに――メンシエヴイキ並びにボルシエヴイキに――新しい精神的集團をかたちづくるに至つたところの、最も高い重要な役割を演じた。而してこれ等のクラクシヨンの鬪爭は革命前に於てもまた革命中に於ても、黨の全歴史を滿してゐると 何ら誇張なしに、吾々は主張することが出來る。かゝるが故に、新しい集團が出來たといふことは、黨の生活に於ては、非常に重要な現象であつて、其れは、新しき情勢の新しき問題に對して、意識的な態度をとり得る爲めには、總ての社會民主々義者が、通觀し、理解し、自ら習得す可きところのものである。

この新しき集團が出來たといふことは、黨の兩極面に於ける、清算派的傾向の出現として、簡單に特徴づけることが出來る。メンシエヴイキに於ては、一九〇八年十二月に、その清算主義が、全く明瞭に現れ、これに對する鬪爭は、殆ど專ら他のクラクシヨン(ボルシエヴイキ、ポーランド及びレツトランドの社會民主黨、『ブンド派』の一部分)の側のみが遂行した。メンシエヴイキ黨員、卽ち清算派に反對なしたメンシエヴイキは、その時代に於ては、傾向として、殆ど存在もしなかつたし、殆ど全く結成してゐなかつたし、また目にとまるほどのものにはなつてゐなかつた。然るに、ボルシエヴイキに於ては、明確に且つ明瞭に、二つの傾向がつくり出されてゐたのだ。卽ち一面に於ては、正統派ボルシエヴイキの壓倒的多數派そのものが、『オトゾヴイズム』に對し

て、決定的に闘爭なし、而も彼等の精神に、協議會の全決議を導き入れたし、他の一面に於ては、『オトゾヴイスト』の少數派が、彼等の見解を、特殊な集團として辯護し、而も彼等と正統派ボルシエヴイキとの間を、動搖してゐた『ウルテマテスト』の側から、再三支持を受けたのであつた。『オトゾヴイスト』及びそれへの傾向を有する限りに於て、(ウルテマテストも)が、顚倒されたメンシエヴイキを、卽ち新しい種類の清算派を、示すものであること——そのことは、再三『プロレタリイ』の中で論ぜられ、明示されてゐる(特に第三九、四二、四四號を參照)。されば、メンシエヴイキは、清算派の壓倒的多數派及び、彼等に對する『黨人』の、辛じて發生しかけた抗議と闘爭を示し、一方ボルシエヴイキは、『オトゾヴイスト』の公然と現出してゐる、少數派の許に、正統派分子の絕對的優勢を示してゐる——其れが、十二月に於けるロシヤ社會民主勞働黨の全國協議會に於て示されたところの、黨內部の情勢なのである。

然らば、この清算派とは何であるか? その發生の原因は、何處に求む可きであるか? 何故『オトゾヴイスト』(及び『神の創造派』なるもの、これに就いては、簡單に述べる可きであるが)が、清算派や顚倒されたメンシエヴイキであるか? 約言すれば、吾々の黨の內部に、新しい集團が出來たことの社會的意義及び社會的重要性は、何であるか?

「狹義に於ける清算派、メンシエヴイキの清算派は、一般的には、社會主義的プロレタリアートの○○○階級闘爭の否定を觀念的に意味し、特殊的には、我がブルヂョア民主々義的○○に於けるプロレタリアートの指導的役割の否定を意味してゐる。」この否定は勿論、種々な形態をとるものであつて、多かれ少かれ意識的に粗野に而も推理的に行はれてゐる。實例として吾々は、ツエレヴーニンとポトレッソフを示すことが出來る。前者は、○○に於けるプロレタリアートの役割に關して、このやうな批評をくだしてゐる。卽ち分裂前に於ける『ゴロス、ゾツアルデモクラタ』(社會民主々義者の聲)の全編輯員(プレハノフ並びにマルトフ、ダン、アクセルロッド、マルチノフ)は、ツエレヴーニンを見すてることの必要なことを知つてゐたものであるが、眞に不體裁な形式に於て、其れを行つたといふのである。謂はゞ彼等は、ロシヤの讀者に對しては、『社會民主々義者の聲』の中で、彼等の聲明書を發表することなしに、ドイツ人の前では、『前進』(フオーヴアエールツ)の中で、その清算派を取り除くことを誓つてゐるのだ! 次ぎに、『二十世紀頭初のロシヤに於ける社會的發展』といふ著書の一論文に於て、ポトレッソフは、ロシヤ革命に於けるプロレタリアートのヘゲモニイの思想を、プレハノフをして清算派的編輯局を立ち去らしめたほど、しかく效果的に清算なしたのである。

「清算派は組織的には、○○○○な社會民主々義黨の必然性を否定するものであつて、それに關聯してまた、ロシヤ社會民主勞働黨を放棄するものであり、この黨から脱退なすものであり、また合法的な新聞欄に於て、合法的な勞働者組織、勞働組合及び協同組合に於て、勞働者代議員の參加する協議會等に於て、黨に對して鬪爭なすものである。」最近二ヶ年に於ける、ロシヤの黨組織のいづれをとつて見ても、その歴史は、メンシエヴキイのこのやうな清算派の無數の實例を示してゐる。清算派の特に具體的な實例として、吾々は既に(『プロレタリイ』第四一號で、後では一九〇八年十二月の『ロシヤ社會民主勞働黨の全國協議會』といふ小册子で述べてある)、メンシエヴイキ中央委員會の成員が、黨の中央委員會を直ちに轉覆し、この機關の機能を拘束しようとつとめた場合を引用した。ロシヤに於ける非合法的なメンシエヴキイ組織の、殆ど完全なる崩壞の徵候として、吾々は、次のやうなことを示すことが出來る。即ち、最近の黨協議會の『コーカサスの代議員』は、總て、國外にあつた黨員から成立つてゐたし、『社會民主々義の聲』の編輯局は、(一九〇八年の頭初までは)黨の中央部によつて、ロシヤに於ける如何なる組織とも、何等の連絡を有しない、特殊な文筆家の團體として、承認されてゐたのである。

メンシエヴキイは、清算派の總てこれ等の現象から、必要な結論を引き出してゐない。「彼等は

幾分かは其れをかくし、幾分かは自己僞瞞をなし、個々の事實の意味を見誤り、瑣事、餘事、私事に沒頭し、普遍的に見ることを知らず、事件の意味を理解してゐないのである。」

然しながらこの意味は、「勞働黨の日和見主義的翼が、恐慌に於ける卽ち崩壞期に於ける、ブルヂヨア革命に際して、清算派としてか、清算派の囚れものとしてか、不可避的に現れなければならないといふこと、そのことに存する。」ブルヂヨア革命期に於ては、プロレタリア黨は、小ブルヂヨア的な協力者をも、不可避的に包括しなければならない。而もこの協力者は、プロレタリアートの理論及び實際を自分自身のものたらしめる資格の最も少いものであり、崩壞の瞬間に於ては、斷乎として立つ能力の最も少いものであり、終局に於て日和見主義に走る傾向の、最も多いものである。崩壞が來ると——知識階級的メンシエヴイキ、メンシエヴイキ文筆家の大衆は、實際に於て自由主義へ走る。知識的な人間は、黨から流れ去り——從つてメンシエヴイキの組織は、大部分崩壞してしまふのである。」プロレタリアート及びプロレタリアの階級鬪爭、プロレタリアートの○○理論に、卒直に同情を持つところの總てのメンシエヴイキ(而も、○○に於けるその日和見主義を紛亂せる歴史的進路のあらゆる轉換、あらゆる屈曲に注意する努力によつて、辯明するがやうなメンシエヴイキは、常に存在してゐた)は、『もう一度少數派』として、メンシエヴイキに於け

る少數派として、清算派と闘ふ實際の意志もなければ、この闘爭を效果的に導く力もないことを證明した。しかしながら日和見主義的協力者は、益々深く自由主義に墮落して行き、而してプレハノフはこれ以上ポトレッソフに『社會民主々義者の聲』は、これ以上ツエレヴーニンに、モスコウのメンシエヴイキ勞働者は、またこれ以上知識階級メンシエヴイキに、等々に忍耐出來なくなつてゐる。かくて、メンシエヴイキの『黨人』、メンシエヴイキに於ける正統派マルクス主義者は、分離し始め、もう一度黨に加はり、而してボルシエヴイキ側のことに、力をつくしてゐるのである。吾々の任務は、この事情を理解することであり、あらゆる方法によつて而も一般的に、黨メンシエヴイキから清算派を分離し、原則上の意見の相違をごまかす意味に於てではなく、眞に統一的な勞働黨を鍛へ上げる意味に於て、それから意見の相違からして、共同の仕事、共同の前進、共同の闘爭を攪亂することなしに、黨メンシエヴイキに近寄ることにつとめることである。

しかしながらプロレタリアートの小ブルヂョア的な協力者は、ひとりメンシエヴイキ、フラクションに限られた占有物であるか？　さうではない。推理的な『オトゾヴイスト』の立論の全方法、『新戰術』を基礎づけようとする彼等の意圖の全性質が、其れを證明してゐるがやうに、彼等が、ボルシエヴイキの側にもまた存立するといふことは、『プロレタリイ』の第三九號に於て、吾々は

既に論及してゐるのである。プロレタリア大衆黨の多少著しい部分が、ブルヂョア革命の時代に於て、多かれ少かれ、最も多種多樣な、大差なき協力者を加入せしめるといふことは、問題の性質からして其れは、避けることが出來ない。「この現象は、プロレタリアトーが常に、小ブルヂョアの最も多種多樣な層と接觸を有してゐて、この層から不斷に、新しい兵を補充するものであるが故に、ブルヂョア革命の完全な決算のすんだ、最も進歩してゐる資本主義國家に於ては、不可避的なものである。またこの現象は、もしも單に、プロレタリア黨が異國的要素を消化することが出來、其れを從屬せしめることが出來、其れに墮落することなく、この要素が實際に於て異國的なものであること、及び一定の事情の下に於ては吾々が、其れを心にとめておかなければならないことを、正しい時機に理解することを知つてさへゐるなら、其れは何等異常なことでもなければ、また驚異に値ひすることでもないのである。ロシヤ社會民主勞働黨の二つのフラクションの間の相違は、この點では、次のやうなことに存する。卽ちメンシエヴイキは、清算派の囚れものとして（卽ち協力者として）自らを示したが――それに就いては、メンシエヴイキ自らの陣列の中から、ロシヤ内に於てはモスコウの同志連中が、それからまた國外に於ては　ポトレッソフと『社會民主々義者の聲』とから分離したプレハノフが證明してゐる――一方ボルシエヴイキに於ては、

『オトゾヴイズム』や『神の創造派』なるものの清算派的要素は、最初から極めて少數なものとして考へられ、最初から無害なものとして見做され、而もやがて遠ざけられて行つたのである。

『オトゾヴイズム』が、顚倒したメンシエヴイズムであるといふこと、其れが清算派に對して、不可避的にまた同樣に、幾分か異れる形態を導くものであるといふこと――そのことには、何ら疑ふ餘地があり得ない。其れが氣分や氣持ではなくなつて、一の特殊な方面を求めるに至るや、其れは勿論のこと、一個人や個々の集團を問題としないで、この方向の客觀的な傾向を取り扱ふのである。ボルシエヴイキは、革命前に於て、非常な明確さを以て次のやうに聲明してゐる。「第一に其れは、社會主義の中に、特殊な方面を創造しようとはしないが、全國際的な○○正統マルクス主義的社會民主主義の根本的原理を、我が○○の新しい情勢に適用しようとするものであると。第二に、其れは、もし鬪爭の後に、あらゆる現存の○○○可能性の絕滅の後に、歷史が吾々に、『專制主義的狀態』の道に引續いて閉ぢこもることを、餘儀なくさせる場合は、最も困難な、最も緩漫な、最も愼重な日常の仕事に於て、其れの任務を遂行することを承知してゐると」、多少注意深い讀者は何人でも、一九〇五年の社會民主々義的文書の中で、このやうな聲明を見ることが出來るであらう。この聲明は、全フラクションの義務として、それから進む可き路の意識的な撰擇と

して、非常な重要性をおびたものである。プロレタリアートの前にこの義務を實行する爲めには、自由の日に社會民主々義に引き寄せられた（其れは『自由の日の社會民主々義者』なる一の特殊な型をさへつくつた）、標語の果敢さや○○精神や『精確さ』によつて、主として取り去られてしまふ、たゞ單に○○○な祭日に於てのみではなく、また反革命的な仕事日に於ても――そのものには鬪爭するだけの忍耐が缺けてゐるところの、總ての分子を斷乎として改造し養成しなければならなかつたのだ。」而して、この分子の一部は、次第にプロレタリア的な仕事に熟練して行つて、マルクス主義的世界觀を獲得した。が、他の一部は、たゞ二三の合詞を學んだに過ぎなくて、而も其れを自分自身のものたらしめないで、古い標語を繰り返してゐて、○○○社會民主々義戰術の古い原則を、別種の情勢に適用することを知らないものであつた。」この二つ部分の運命は同樣に、第三ロシヤ國會のボイコットを主張したところの人々の進化によつて、明瞭に說明される。一九〇七年六月に於ては、其れはボルシエヴイキ、フラクションの多數派であつた『プロレタリイ』はしかし、斷乎として、反ボイコットの方針をかゝげてゐた。ところが、現實は、この方針に試金石を與へ、而も一年後には『オトゾヴイスト』は、モスコー組織のボルシエヴイキの下に於ても、（一九〇八年夏には、十八對十四票で）少數派となり『オトゾヴイズム』の誤謬に對しては、

多方面的に幾回も、批判の攻撃をあびせ、かくてボルシエヴイキ、フラクションは（實にその點に、ボルシエヴイキの最近開かれた協議會の意義が存在する）、斷乎として『オトゾヴイズム』及び其れに豹變するウルテマテズムを清算なし、清算主義のこの固有の形態を、斷然清算なしたのである。

されば人々は吾々に、『新しい分裂』といふ非難を、向けることは出來ないのだ。吾々は、吾々の協議會に關する報告の中で、吾々の任務及び吾々の態度を、詳細に聲明なしてゐる。吾々は、異れる思想を持つ同志を説服する爲めに、出來るだけのことをなし、あらゆる方法をつくし、そのことの爲めに、一ケ年以上を活動して來た。しかしフラクションとしては、卽ち黨内に於ける思想的同志の結合としては、根本的な問題に於て吾々は、統一なしには仕事を進展せしめることが出來ない。フラクションからの分離は、黨からの分離とは、多少異れるものである。從つて、吾々のフラクションから分離したところの人々は、黨に於て引き續き仕事をする可能性を、決して失ふものではない。たとへ彼等が『無所屬』として、卽ちフラクション外部にとどまるとしても、彼等は一般的な黨の仕事に關與しなければならない。もしまた、彼等が一の新しいフラクションを、形成しようとするならば――其れは、彼等が見解や戰術に於て、特殊な僅かの差異を固

執し、更らに其れを發展させようとする限り、彼等の神聖な權利である――その時は、黨全體が、吾々が前にその精神的な意義を批判したところの總ての傾向を、全く容易に解き明すであらう。

ボルシエヴイキとは、そもそも黨に指導しなければならないところのものなのである。而してその指導をなす爲めには、吾々は、一つの方法を知つてゐなければならないのだ。卽ち、吾々は動搖してはならない。また動搖分子の説服や、思想を異にするものに對する、フラクション内の鬪爭に、時間を浪費するやうなことがないやうにしなければならないのだ。『オトゾヴイズム』及び其れに豹變するウルテマテズムは、〇〇〇社會民主々義者の支配的關係が要求するところのあらゆる仕事と一致しない。吾々は、〇〇の期間に於て、『フランス語で話す』こと、卽ち前方に押し進める標語の最大限を運動に與へ、直接的な大衆鬪爭の活動力及び飛躍を高めることを學んでゐる。今や吾々は、停滯、反動、崩壞の期間に於て、『ドイツ語で話す』こと、卽ち緩漫に行動をとること（新しい飛躍期が來るまでは、他に方法がない）、組織的に、不撓不屈に、徐々に前進すること、一寸また一寸と克服してゆくことを學ばなければならない。而して、この仕事に於て退屈するもの、このやうな進路、このやうな轉換路の上にもまた、社會民主々義的戰術の〇〇〇基礎を保ち、且つ其れを更らに發展することの必要性を、理解してゐないものは何人でも、マルク

ス主義者の名に値ひしないのである。

吾々の黨は、清算派の決定的な清算なしには、前進することが出來ない。清算派には、單にメンシエヴイキの直接的な清算主義及びその日和見主義的な戰術が、屬してゐるのみではない。其れにはまた、顚倒したメンシエヴイズムが屬してゐるのである。其れには、現在の時機の固有な特質を示すところの、さし迫れる任務、卽ちロシヤ國會の演壇を利用し、勞働階級の一切の半合法的及び合法的組織から、支持黨をつくり出すことの任務、そのものの遂行を妨害なすものである、かの『オトゾヴイズム』や『ウルテマテズム』が屬してゐる。其れには根本的にマルクス主義とは相反するところの、『神の創造派』及び『神の創造派』的傾向の辯護者が屬してゐる。其れにはまた、ボルシエヴイキ黨の任務の誤解者も屬してゐる。ボルシエヴイキ黨そのものの任務とは、一九〇六——〇七年に於ては、黨の多數の支持を受けてゐなかつた（ポーランド人やリトワニヤ人のみではなく、『ブンド派』さんも當時は、純メンシエヴイキ中央委員會を支持してゐなかつた）ところの、メンシエヴイキ中央委員會の廢棄といふことにあつたもので、今日に於ては、黨分子の忍耐强い訓練、結成、眞に統一的で强固なプロレタリア黨の創立といふことにあるものである。一九〇三——〇五年及び一九〇六——〇七年に、ボルシエヴイキは、黨に對して反對の

分子に、徹底的な鬪爭を行ひ、黨の爲めにその進路を開いた。今やボルシエヴイキは、黨を建設しなければならない。卽ち、フラクション鬪爭に於て、戰取したところの地位によつて、フラクションの中から、黨を建設しなければならない。

其れが現在の政治的モメント及び全ロシヤ社會民主勞働黨の一般情勢に關聯する我がフラクションの任務なのである。この任務は、最近開かれたボルシエヴイキ協議會の決議の中で、再度特に詳細に亘つて、繰り返され且つ展開されてゐる。戰陣はまた、新しき鬪爭の爲めに變更されてゐる。變れる情勢は、考察されてゐる。進路は選ばれてゐる。されば、この道を前進せよ——然らば、ロシアの〇〇〇社會主義的勞働黨は、如何なる反動によつても、破壞されることのない、而も吾々の〇〇が來る可き時代に於ては、人民のあらゆる鬪爭階級の先頭に立つところの力に、迅速になるであらう。

十四、清算派及び清算派の集團に就いて

(一九一二年の一月協議會の決議)

協議會は、次のやうに考察してゐる。

一、ロシア社會民主勞働黨は、既に約四ケ年來、清算派的傾向に對して、決定的な鬪爭を行ひ、而して一九〇八年の十二月協議會に於ては、次のやうに定義してゐるものである。

『知識的な黨員の一部は、ロシア社會民主勞働黨の現存の組織を清算し、其れを合法性の範圍内に於ける無形態の結合よつて、置き換へんとしてゐる。たとへこの合法性が、黨の綱領や戰術や傳統の公然の放棄によつて購はれるとしても』

二、一九一〇年一月に於ける、中央委員會の全員會議は、この傾向に對する鬪爭を續行する一方、後者を、プロレタリアートに對するブルヂョアジーの影響の現れとして、滿場一致を以て承認なし、而も實際的な黨の統一及び、ボルシエヴイキとメンシエヴイキとの既往のフラクションの融和の爲めの條件として、清算派との完全な分離と、社會主義からのこのブルヂョア的な離反の斷乎たる克復を、要求なしたものである。

三、黨の總ての決議にも拘らず、また一九一〇年一月の全員會議に於て、總てのフラクションの代表者によつて、採用されたところの義務にも拘らず、雜誌『ナーシヤ・サリヤ』(吾々の曙光)や『デエロ・シスニ』(生活事情)に集團なしてゐるところの、社會民主々義者の一部は、全體の黨によつて、プロレタリアートに對するブルヂョア的影響の所産として認められてゐるところの傾向を、公然辯護につとめてゐるものである。

四、中央委員會の以前の委員、即ちM・L(マルトフ)、ユリー及びローマンは、一九一〇年の春に、單に中央委員會に參加することを拒否したのみではなく、新しい委員を選擧する爲めの會議にさへもまた、出席することを拒否し、而も彼等は、中央委員會の單なる存在が、『有害』なるものであるといふことを、公然宣言した。

五、清算派の全主要機關紙、『ナーシヤ・サリヤ』及び『デエロ・シスニ』は、眞に一九一〇年の全員會議以後に於て、決定的に而も全線に亘つて、清算派に傾き、而して(全員會議の決議に對立して)、單に『〇〇〇〇黨の條件を蔑視した』のみではなく、其れを直接的に拒否し、黨を『死屍』として見做し、黨は既に清算されたもののやうに宣言なし、〇〇〇〇な黨の復活を、『反動的

ユートピア』だと見做し、○○○○な黨に　合法的な雜誌の欄で、誹謗と侮辱を注ぎかけ、黨細胞及び黨の組織が、『死滅してゐる』と宣言することを、勞働者に要求なした、等々。

全ロシアに於ける黨員が、フラクションの差別なしに、議事日程にのぼつてゐる仕事を、黨協議會召集の爲めに遂行せんとして、合同した時期に於て、清算派は全く獨立の小集團として分立し、メンシエヴイキ黨員が優勢な地方に於てさへも(エカテリ・スラフ・キエフ)分裂し、而もロシア社會民主勞働黨の地方的組織との總ての關聯を、其れは斷然放棄してしまつたのである。

かゝるが故に協議會は、『ナーシヤ・サリヤ』及び『デエロ・シスニ』の集團が、それ等のものの態度からして、黨の外部に斷然存立するものであることを宣言してゐるのである。

かくて協議會は、傾向や色彩の差別なしに、清算派に對して鬪爭を行ふこと、勞働階級解放問題にとつて、其れが有害なることを一切明白ならしめること、及び○○○○なロシア社會民主勞働黨の復活と確立の爲めに、全力を傾注することを、全黨員に要求してゐるものである。

十五、ボルシエヴイキ成功の一主要條件

(一九二〇年に書いた『急進派、共產主義の小兒病』から)

今やおそらく、何人もこれを認めてゐるであらう。吾々の黨の最も嚴格な、眞に鐵のやうな規律がなく、また勞働階級の全大衆による、卽ちこの階級の爲めを思ひ、忠實で、獻身的で、有力な、而も進步の遲れてゐる層を、ひきずつて行くことの出來る總ての人々による、完全にして無限の支持なしには、ボルシエヴイキは、二ケ年半はおろか、二ケ月半と雖また、權力を把持することが出來なかつた。

プロレタリアートの○○○○○○○○○は、より强力なる敵に對する、卽ち(たとへ一國內のものであつても)その崩壞によつて、抵抗力を十倍にする、而もその權力は、たゞ國際的な資本の力、卽ちブルヂヨアジーの國際的關係の强大さ及び强固さに依存するのみではなく、また慣習の力や小工場の力に依存するところの、かのブルヂヨアジーに對する、新しい階級の最も頑强で最も强烈な、容赦なき戰ひである。何故かなれば世界には不幸にもまだ、非常に多數、小工場が存

在してゐて、實にその小工場は、日々刻々に、自然發生的に、且つ大規模に、資本主義を生み出し、ブルヂョアジーを存續せしめてゐるからである。總てこのやうな根據からして、プロレタリアートの○○○○○○○○○が、必須なものとなるのであつて、ブルヂョアジーに對する勝利は、長時間的で忍耐强い、生死定めなき鬪爭——克己的であること、規律を重んずること、頑强であること、强情であること、意志の强いことを要求する鬪爭なしには、其れは不可能である。

私は繰り返して云ふ。ロシアに於ける戰勝プロレタリアートの○○○○○○○○○の經驗は、この問題に關して、考へて見ることを知らなかつた、或はよく考へて見ようともしなかつたところの人々にまた、ブルヂョアジーに對する勝利の爲めの主要な條件の一つが、絕對的な中央集權と嚴格な規律とであるといふことを、明瞭に示してゐるものである。

そのことに就いては、屢〻述べられてゐる。しかしながら其れが何を意味してゐるか、如何なる條件の下に於て、其れが可能であるかといふことは、毫も充分に考察されてゐない。ソヴイエット政府及びボルシエヴイキに對して與へる喝采と共に、人々は、○○○プロレタリアートにとつて缺く可からざる規律の設定を、ボルシエヴイキをして可能ならしめたところの理由の最も眞劍な分析を、屢〻行ふ可きではないか？——ボルシエヴイキは、一九〇三年以來、政治的思想の

一傾向として、それから一の政黨として存在してゐる。ボルシエヴイキ成立の全時期を包括するところの、其れの歷史のみが、如何にして其れが、最も困難な事情の下に於て、プロレタリアートの勝利の爲めに缺く可からざる、鐵のやうな規律を、設定し維持することが出來たかといふことを、充分に說明することが出來る。

かくて第一に先づ、プロレタリアートの○○○黨の規律が、如何にして保持されるか？　如何にして其れが統制されるか？　如何にして其れが强められるものであるか？　といふ問題がこゝに浮び上つて來る。第一に其れは、プロレタリア前衞の意識の程度と○○に對する獻身、克己力、犧牲的行爲、英雄主義によつてである。第二には、廣汎な勤勞大衆と、先づ第一にはプロレタリア勞動大衆と、それからまた非プロレタリア勤勞大衆と、彼等が結合し、團結し、さしつかへなければ、或る程度にまで統合するやうにすること、そのことによつてである。第三には　この前衞によつて實際化されるところの、政治的指導の正確さによつてであり、廣汎な大衆が、その正確さに就いては、それ自らの經驗によつて納得するといふことを條件としての、彼等の政治的戰略戰術の正確さによつてである。而してこのやうな條件なしには、プルヂョアジーを○○し、全社會を○○しなければならないところの、○○○階級の黨として、眞に資格ある○○黨に於ける

規律は、現實に運用されてはゆかないのである。また、このやうな條件なしには、規律は、必然的に無意味なもの、空言空語、一つの喜劇にされてしまふに過ぎない。しかし一面、このやうな條件は、俄かに成立し得るものではない。其れは、永續的な活動と困難な經驗の結果であつて、その展開は單に、正しい○○理論、卽ち何ら獨斷の存しない、眞の○○運動の實際と、緊密な結合を有することに於てのみ、確乎たる形態をとるところの理論によつて、容易なものとなるに過ぎない――かくて、一九一七年――一九二〇年に於てボルシエヴイキが、未聞の困難な事情の下に於て、最も嚴格な中央集權と鐵のやうな規律とをつくり、而も其れを效果的に實現し得た時、その原因たるや、實にロシヤの歷史的特殊性に見られるのである。

一面に於ては一九〇三年ボルシエヴイズムは、マルクス主義的理論の强固な基礎の上に存立してゐた。實にこの理論――この○○理論のみの正しさは、十九世紀全體の經驗を通じて證明されたのみでなく、ロシヤに於ける○○思想の錯誤と動搖、失敗と絕望の經驗によつてもまた、證明されてゐるのである。前世紀の約四十年代から九十年代に至る、半世紀の期間に於て、未聞の野蠻で反動的なツアーリズムの桎梏の下にあつたところの、ロシヤに於ける進步的な思想家は、むさぼるやうに正しい○○○理論を求め、驚く可き熱情と偉大な注意を以て、この範圍のことに關

する歐洲及びアメリカの『最後の言葉』を追求なしたものである。かくて、ロシヤは、歷史上未聞の困苦と獻身の半世紀を通じて、未聞の○○○ヒロイズム、信じられないほどの精力と無際限の追求、研究、實際的探求、絕望、實驗、歐洲の經驗との實際的比較研究などを通じて、マルクス主義を唯一の正しい○○○理論として見做した。ツアーリズムによつて强制された移民のおかげで、○○ロシヤは、十九世紀の後半に於て、世界の他のどの國にも見られないやうな、豐富な國際的聯絡と○○運動の世界的な形態と理論のすぐれた方向を獲得した。

他の一面に於ては、この花崗石から刻み上げられたやうな、理論的基礎の上に存立するボルシエヴイキは、比類なき豐富な經驗を有するところの、十五年（一九〇三年――一九一七年）の實踐的歷史を經驗した。一體、如何なる國と雖、この十五年間に於て、ロシヤのやうに、○○的經驗の意味で、それから運動の種々な形態の推移及び變化、卽ち合法的であり○○○的であつた、平和的であり暴風的であつた、○○的であり公開的であつた、議會主義的であり○○○○○的であつた、小祕密集會であり大衆運動であつたといふ意味で、殆ど全くそれほど多くのことを經驗したものはないのである。また如何なる國に於ても、かくも短期間に於て、このやうに豐富に、近代社會のあらゆる階級の鬪爭の形態、色彩、方法を、集中したものはなかつた。さればそこで

は、進歩の遲れてゐる國であるといふことの爲め、及びツアーリズムの恐る可き桎梏の爲めに、特にその鬪爭が迅速に發展し、また特に熱情的にも效果的にも、其れが、アメリカ及び歐洲の政治的經驗の『最後の言葉』なるものに一致を見出したのである。

十六、一致の活動、統一的な意志

(一九二一年三月ロシア共産黨第十回黨大會の演說から)

私は今や、全然他の領域に屬してゐる他の問題に——黨が非常に多くの時間を費したところの、勞働組合に關する討議にうつらう。私は今日既に、そのことに就いて述べなければならなかつたのだが、而も私は明瞭にたゞ愼重に、この討議を非常な贅澤事として見做さないものは、諸君の中にはおそらく澤山ゐないといふことを、述べることが出來たに過ぎない。私一個人に關するところでは、この贅澤事は私の見解では、眞に全く許す可からざるものであつたこと、吾々がこのやうな討議を許した時、吾々は疑ひなく一の過失を犯したものであることを、附言しないではをられないほどである。吾々は、この討議に於て、客觀的情勢によれば第一位に置くことの出來ない問題を、吾々が第一位に押しやつたといふこと、それから一の贅澤事に、吾々が自らを引き渡したものであるといふことを看取してゐない。卽ち吾々は、この同じ危機に關するところの當面のさし迫れる、吾々の非常な手近かに横はる問題から、如何に高い程度に、注意をそらして

ゐるかを、看取してゐないのだ。さて、非常に多くの月日を費し、おそらく出席者の多數の心を退屈なものたらしめたところの、この討議の實際上の結果は、如何なるものであるか。諸君は、其れに就いては、特別の報告を受けるであらう。しかし私は、私の報告に於て、問題の一面に、即ち『何らの惡なきことは、また何らの善なきことだ』といふ俚諺が、こゝでは疑ひなく眞理であつたことそのことに、注意を向けようとするものである。

不幸にも惡は幾分多くて、善は幾分少かつた。しかし尙ほ且つ善は、吾々が時間を失ひながらも、また吾々が、我が黨同志の注意を、吾々をとり卷いてゐた、小ブルヂヨア分子に對する鬪爭の當面の任務からそらしながらも――而も、吾々が未だ曾つて見なかつた或る交互關係を區別することを學んだといふこと、そのことにある。而してその善は、黨が、この鬪爭に於て必然的にその若干を學ばなければならなかつたといふことから生じたのである。吾々は皆な、吾々が統制的な黨として、ソヴイエットの尖鋭分子と、黨の尖鋭分子とを結び合はさなければならなかつた――彼等が吾々に結び合されてをり、また結び合はされて行くであらう――といふことを意識してゐたにも拘らず、而も黨は、この討議において、必然に注目されなければならない、或る教訓を感知したのである。その爲めに黨の尖鋭分子は、特に一の綱領を決定した。或は『勞働反對派

の綱領』と稱され、或は何らかの名稱で呼ばれたところのこの綱領は、其れ自らが證明してゐるがやうに、明白にサンデカリズム的な離反を示してゐる。而も其れは、私一個人の意見ではなくして、出席者の大多數の意見なのである。

かくて、黨はこの討議に於て、非常に成熟してゐることを證明した。即ち其れが、尖鋭分子の或る動搖を看取した時、尖鋭分子が、『吾々は一致しないが、吾々の間の仲裁者である』と語つたことを看取した時――この任務の爲めに、迅速に動員を行ひ、且つまた黨中央部の壓倒的多數は吾々に對して迅速に、『吾々は一の意見を有してゐるので、其れを諸君に述べるであらう』と答へたほどであつた。

吾々は、この討議に於て、一連の綱領を獲得した。而も其れは、非常に煩雜で、例へば職務上其れを讀む義務がある私にも拘らず、自らは通り過ぎて、其れを全部讀まないことを氣づかつたほどである。總ての出席者が、其れを讀む爲めに、充分に餘暇があつたかどうか、私は知らないが、いづれにもせよ、白日の下に現れてゐるところの、このサンデカリズム的及び、或る程度までは實に半無政府主義的離反が、其れを考察する爲めの多くの材料を與へてゐるといふことを、述べなければならないのである。吾々は數ケ月の間、見解に於ける色分の研究に、吾々を引き込

んだところの贅澤事に傾倒してゐた。その間に於て、經濟的危機は、軍隊が武裝を解いたことによつて激化された。この討議は、吾々の黨が、約五十萬よりは少くない黨員を有する、而もこの五十萬を超過しさへしたところの黨として、第一に大衆黨に、第二には統制的黨になつてゐるといふこと、それからまた、其れが大衆黨として、部分的に、何らか陳列外に先行するところの或るものを反映してゐることを、吾々をして理解せしむるのに、役立たなければならなかつた 其れを理解するといふことは、非常に々々に重要なことである。で輕小なサンデカリズム的及び半無政府主義的離反は、有害ではあり得ない——黨は、迅速に且つ決定的に、其れを認識なし、而も其れが改善に着手してゐる。しかしながらもしもこの離反が、地方に於て驚くほど優勢な農民と結合されるならば、其の時は吾々は、理論的離反に就いては論爭の餘地ある時ではない。其の時は吾々は、其れから必要な教訓を、引き出さなければならないのだ。吾々は、其れに中央委員會の政治的報告を、附け加へなければならないし、其れを總て確乎たるものたらしめ、斷然强固な基礎を與へ、黨に對する義務に、卽ち法律に變へなければならないのだ。論爭の狀態は、最も高い程度に於て、危險なものになりかけてゐる。討議の際に、私が出會つて論爭しなければならなかつたところの二三の同志は、數ケ月前に私が、『注意せよ、こゝに、勞働階級の支配と勞働階

級のデクテエターシップの脅威が存立してゐる』と云つた時、彼等は私に、『其れは、一の威嚇的な態度であり、貴君は、吾々を脅迫するものだ』と云つた。私は事實幾度となく、私が述べたことに對して、このやうな解釋を聞かなければならなかつた——私が誰れかを脅迫してゐるといふ——ので、其れに對して私は、種々な試練を經驗してゐる古い革命家を脅迫するなんて、私にとつて笑ふ可きことであることを答へた。しかしながら吾々が、如何なる態度にまで、武裝を解くことの困難が、發展してゐるかを看取するならば、其の時は、こゝには單に、何らの脅迫がないのみではなくして、論爭に於て一度も、不可避的な有頂天さを示してゐる譯でもないし、反つて何が調停に立つてゐるかといふ全く正確な暗示を其れに與へてゐるといふこと、而して同志意識、忍耐及び規律を、吾々が必要とするといふこと——何故かなればこのやうなものがなくしては、プロレタリア黨は、一致の活動が出來ないからであるといふ爲めのみではなく、今春は、吾々が偉大な同志意識なしには、活動し得ないやうな、それほど困難な事情を、吾々に持ち來してゐるが故であるといふ爲めにも——そのことに就いては、吾々は何ら論爭の餘地はあり得ないのである。この二つの最も重要な教義を、吾々は、私が信じてゐるがやうに、不斷に討議から引き出すことを理解するであらう。而してそれ故に、私の見るところでは、次のやうなことが述べ

られなければならない。吾々が、かの贅澤事に傾倒して、而も絶望的な鬪爭の最も困難な條件に置かれた黨が、如何にして一の綱領の個々の細目の闡明のそれぞれに、未聞の注意を向けたかといふことに對して、世界に一の驚く可き手本を示し得たならば——其の時は吾々は、一の政治的結論を引き出してゐた。而もその政治的結論たるや、單にあれこれの失敗を示すところのものではなくして、階級間の、勞働階級と農民の間の關係に觸れた政治的結論であり、それから吾々が陷つてゐるところの凶作と恐慌の事情の下に於ける、荒廢と武裝解除の事情の下に於ける政治的結論なのである。されば、この事情は、吾々が信じてゐるやうなものではない。この事情は、非常に大きな團結力と勢力の中央集權化とを、プロレタリアートに要求し、この事情は、プロレタリアートのデクテエターシップの下に、デニキン、コルチヤツク、及びユーデニッチの總てを合した數倍以上の危險を、示現するものである。この點に於ては、其れが非常に高い程度に於て、宿命的なものであつたが故に、毫も僞瞞が存在してゐない。これ等の小プルヂョア分子から生ずる難事は、尨大なものであり、且つ其れを克服する爲めには、一の巨大な、單に形式的ではない同志意識を必要とする——その爲めには、統一的な、一致ある活動を必要とするし、その爲めにはまた、統一的な意志を必要とする。何故かなれば、プロレタリア大衆のこのやうな意志が存在

する場合にのみ、一の農民國に於けるプロレタリアートは、デクテエターシップの巨大な任務を實現することが出來るからである。

十七、黨の統一に就いて

(一九二一年三月のロシア共産黨第十回黨大會の決議)

これはブハーリンが、同志レエニンとの密接な協力の下に、起草したものである(英譯による——譯者)

一、黨大會は、一連の事情が、この國の小ブルヂョア的人民の間に、動搖を強めてゐる現在のやうな時期に於ては、黨の陣列の統一及び同志意識、黨員間に於ける完全な信頼の保證、及びプロレタリヤ前衛の統一的な意志に、眞に一致的に、實際的に具現された活動が、特に必要なものであることに、全黨員の注意を喚起する。

二、勞働組合に關する黨の論議に先立つて、黨内に於けるフラクション主義の幾分かの徵候、卽ち特殊な綱領を有してゐて、而も或る程度にまで、自らを孤立せしめ、獨目の集團規律を創造せんとつとめる傾向が、許されてゐた。

總ての階級意識のある勞働者が、あらゆるフラクション主義の、有害なことや許す可からざることを、明白に認識することが必要である。その分派主義なるものは、實際に於ては不可避的に、一致的な活動を弱めることに導いて行くし、また分裂を深め、反革命の爲めに其れを利用せんとする爲めに、統制的な黨に忍び込まんとする敵の企てを、强めもするし、繰り返へすことにもなるのである。

ブロレタリアートの敵によつて、嚴格で推理的な共産主義的方策からのあらゆる離反が、利用されるといふことは、クロンスタットの〇〇の實例に於て、特に具體的に示されてゐる。その暴動の際、ブルヂョア反革命及び世界のあらゆる國々の白衛軍は、直ちに、單にロシヤに於けるプロレタリアートのデクテエターシップを轉覆する爲めに、ソヴイエット組織のスローガンをさへも採用せんとする、彼等の用意を示した。またその際、社會革命黨及びブルヂョア反革命は、クロンスタットに於ける暴動のスローガンを利用し、ロシヤに於けるソヴイエット政府に對するソヴイエットの暴動ででもあるが如く見せかけた。このやうな事實は、單にロシヤに於けるプロレタリア革命の堡壘を、弱め且つ轉覆する爲めに、白衛軍が、自らを共産主義者として、加之『それよりかもつと左へ』寄つた分子として、僞稱せんと努力し、またさうすることを知つてゐるものであることを、充分に示してゐるのである。而して、クロンスタット暴動前のペトログラード

に於ける、メンシエヴイキのリーフレットは同様に、メンシエヴイキが、ロシヤ共産黨内に於ける意見の相異を、クロンスタット暴動や、社會革命黨及び白衞軍を實際的に激勵なし、且つ支持する爲めに、利用なしたことを示してゐる。と同時に、社會革命黨及び白衞軍は、言葉の上では、その暴動の反對者であり、ソヴイエット權力の味方であると見せかけるが、其れは見えすいたごまかしである。

三、この問題に於ける宣傳は、一面に於ては、黨の統一及び、プロレタリア、デクテエターシップの成果の爲めの根本條件としての、プロレタリア前衞の意志統一の實現の見地からして、フラクション主義の有害なこと及び危險なことの徹底的な解釋にあらねばならないし、他の一面に於ては、ソヴイエット權力の敵の最も新しい戰術的方法の特質を、說明することにあらねばならない。公然たる白衞軍の旗の下に、反革命が望みなきことを知つたこの敵は、今や、ロシヤ共産黨内に於ける意見の相異を利用することに於て、外面的にはソヴイエット權力の承認を裝ふてゐるところの政治的集團に、權力を交附することによつて、反革命を前進せしめる爲めに、あらゆる努力を拂つてゐる。

かくて宣傳は、革命的デクテエターシップを切崩し顚覆する爲め、及びそのことによつて、反

革命卽ち資本家及び地主の來る可き完全な勝利への進路を開く爲めに、極端に革命的な黨に、最も接近なしてゐる小ブルヂヨア的集團を、反革命が支持してゐた、既往の革命の經驗をもまた、明白ならしめなければならないのである。

四、總ての黨組織は、或る『綱領』などの基礎の上に、自らを結成してゐるところの、集團の討議によつてではなく、全黨員の討議によつて、無條件的にも必然的にも黨の缺陷に就いて批判をくだすこと、それからまた、一般の黨政策の分析及びその實際的經驗の考察、黨の決議を達成せんとする試み、失敗の改善法等々を行ふことを、最も嚴格に重要視しなければならない。この目的の爲めには、黨大會は、『討論新聞』及び特殊な論文集の、正規的な發行をなすことにしてゐる。批評をなす總てのものは、敵にとり圍まれてゐるところの黨の地位を、顧慮しなければならないし、また彼等は、ソヴイエット及び黨の仕事に、直接參加することによつて、黨の失敗の實際的改善につとめなければならないのである。

五、黨大會は、あらゆるフラクション主義を完全に取り除く爲めに、中央委員會を代理すると同時に、黨員の注意を特に惹いてゐる問題——黨を、非プロレタリア的及び信賴しがたき分子から淨めること、官僚主義に對する鬪爭、民主々義及び勞働者の自發的活動力の發展等に關する—

ーに於ては、非常な注意を以て、あらゆる實際的な提議を吟味し、而も實際的活動に於て、試練を與へなければならないといふことを聲明する。總ての黨員は、黨が、非常に多くの種々な障害に遭遇するが故に、このやうな問題に於て、總ての必要事項を實現してゐないといふこと、それから、黨が不確實な分派的な批評を決定的に拒否することによつて、新しい方法を吟味することに於てあくまで、民主々義及び自發的活動力を擴大する爲め、及び黨内に忍び入つてゐる分子を發見し、假面をはぎ、追ひ出す爲め等々に、官僚主義に對する鬪爭のあらゆる手段を、持ち來すであらうといふこと、を知らなければならないのである。

六、黨大會は、何らか獨自の綱領を基礎として、結成されてゐるあらゆる集團を、例外なしに、直ちに解散せしむ可きを規定してゐるし、またフラクション的言動を許してはならないことを、あらゆる組織に、嚴格に注意してゐる。而してこの黨大會の決議事項を實行しないものは、無條件に且つ即時に、黨から放逐されなければならない。

十八、黨の廓清に關して

（一九二一年九月二十一日『プラウダ』第二十一號）

黨の廓清は、眞劍な非常に重要な仕事にまで、明かに發展してゐる。

或る地方に於ては、黨を廓清せんとする人は、主として、黨外勞働者の經驗や報告に依據し、その報告によつて自らを導き、且つ黨外プロレタリア大衆の代表者と協議なしてゐる。このことは、何よりも意義のある、何よりも重要なことである。吾々がこの方法で、個人に對する顧慮なしに、眞に黨を上から下まで廓清することに成功したら、〇〇が實際成就するところのものは、偉大なものである。

何故かなれば〇〇が成就するところのものは、今や、既往の其れとは、別種のものであるからである。〇〇は今や、軍事的戰線から經濟的戰線への過渡、即ち新經濟政策への過渡に應じて、それから第一には勞働生産力の增大及び勞働規律の增大を要求するところの情勢に應じて、それの性質を變化しなければならないのだ。かゝる時代に於ては、〇〇が成就する主要事は、勞働及

びその處理、その結果の、顯著にして誇大な、直ぐ認め得るやうな改善ではなくて、國内的改善であり、プロレタリアート及び黨が陷り易いところの、小ブルヂョア的及び小ブルヂョア無政府主義的分子の影響に對する、鬪爭の意味に於ける改善である。而してこのやうな改善を遂行する爲めには、吾々は、大衆を遠ざけてゐる分子から、黨を淨めなければならない（勿論、大衆の眼に黨をけがしてゐる分子は、云ふまでもないことだ）。而して勿論吾々は、大衆のあらゆる指示に對して、常に忠實な耳を持つものではない。何故かなれば大衆は常に――過度の重荷と固苦による、恐る可き疲勞困憊の時期に於ては特に――決して前進的ではないところの指示を、與へるものであるからである。しかしながら自らを黨に固着させてゐる、『官僚化し』、『委員化』してゐる人々の否定的な批評にとつては、黨外プロレタリア大衆の意見及び、多くの場合に於てまた、黨外農民大衆の意見が、極めて價値あるものである。勤勞大衆は、正直で献身的な共産主義者と、顏に汗してパンを求める、何らの特權を有せず、『政府當局への手づる』を何ら持たない單純な人間に、嫌惡を示すところの連中との間の差異に對しては、すぐれた識別力を持つてゐるものである。

黨を廓清するに當つては、黨外勤勞者の意見に耳を傾けることが、重大なことであつて、其れは、嚴肅な結果を示す。其れは、以前にもまして黨を、階級の遙かより强力な前衛たらしめ、其

れをまた、階級に遙かより强固に結合されてゐるところの、それから多くの困難や危險の下に於て、勝利を獲得する、遙かより多くの可能性のあるところの、前衛たらしめるであらう。

黨廓清の一の特殊な任務として私は、黨を其のメンシエヴイキから淨めることを、擧げることが出來る。私の見解によれば、一九一八年の始めよりも前に、黨に參加してゐたところのメンシエヴイキ(一)の中、僅か百分ノ一足らずが、黨に放置さるべきであつて、而もこの殘留者達にも、再三再四の吟味を加へなければならない。何故であるか？　メンシエヴイキは、一九一八年――一九二十年の期間に於て、一の主義として二つの特質を示したが故である。卽ち第一には、勞働者の間に、優勢な主義に自ら巧みに順應し、自らを『附着』せしめる能力を與へたし、第二には、白衞軍に忠實に且つ熱心に奉仕し、言葉の上では何ら其れを示さうとしなかつたが、行爲によつて彼等に奉仕した、より以上の巧妙さを示したからである。而してこの二つの特質は、メンシエヴイキの全歷史の中に現れてゐるものであつて、吾々は、アクセルロッドの『勞働者評議會』を、立憲民主黨（カデット）（及び君主政治）に對する、メンシエヴイキの關係等々を、單に想起して見れば足りるのである。メンシエヴイキは、單にマキアベリズムからではなく、實に全然マキアベリズムからではなく、その『順應性』の結果（一九〇三年以來ブルヂョア外交術に於ては、メンシエヴイ

キは、その教養に於て第一流の大家であることを示してゐるにも拘らず)、ロシヤ共産黨に『自ら附着』してゐるものである。あらゆる日和見主義者は、順應性によつて、特徴づけられてゐる(順應性なるものは總て、日和見主義ではないけれど)。而して日和見主義としてのメンシエヴイキは、勞働者の間に優勢な主義傾向に、謂はゞ『原則上』自らを適應させ、且つ彼等は、野兎が冬には白くなるがやうに、自分にとつて必要な色を備へる。メンシエヴイキのこのやうな特質を、吾々は知つておかねばならないし、また彼等との交渉を心得ておかなければならない。而して吾々がこの特性に注意するならば、黨を――吾々をして云はしむれば、一九一八年以後、卽ちボルシエヴイキの勝利が、先づ確實なるかの如く見え、次いで明かに確實なものとなつた當時、ロシヤ共産黨に參加したところの、總てのインシエヴイキの百分ノ九十九人から、洗ひ淨めなければならないのである。

(一)、同志レエニンが、こゝでは昔のメンシエヴイキに就いて語つてゐる限り、彼は勿論第一に知識階級的メンシエヴイキ分子を指してゐるものである(編者註)

かくて吾々は、黨を、詐欺師共や、官僚化してゐるあらゆる連中や、不忠實な共産主義者や、動搖不定な態度の者共や、『表面』を新に塗つてゐるけれども內心は依然として變らないメンシエ

ヴイキから、廓淸する必要があるのである。

十九、『獨逸共産主義者への手紙』から

（一九二一年八月十四日書かれたもの）

……コンミユニスト・インターナシヨナル第三回大會の戰術及び組織に關する決議は、すばらしい一歩前進を示してゐる。吾々は、これ等の決議を實現に移す爲めに、全力をつくさなければならない。そのことは、困難なことであるが、しかし其れはなし得るし、またなされなければならないのだ。

共産主義者は特に、彼等の主義精神を、全世界に聲明しなければならない。其れは、第一回大會に於て遂行された。其れは、第一歩であつた。コンミユニスト・インターナシヨナルの組織的構造の問題及び、コンミユニスト・インターナシヨナルに於ける、其れの採用條件の作製、即ち中央派及び勞働運動内部のブルヂヨアジーの直接的間接的手先からの、實際的な分離を意味するところの事項は、其れは第二歩であつた、而して其れは、第二回大會に於て行はれたものであつた。

かくて、第三回大會に於ては、吾々は、積極的活動を開始しなければならなかつた。吾々は、既に行はれた共産主義的闘爭の實際的經驗を基礎として、如何なる方法に於て、戰術的及び組織的事業を完成す可きであるかを、具體的に決定しなければならない。これが即ち、今や吾々が踏み出してゐる第三歩である。

（一）吾々は世界のあらゆる地方に、共産主義者の軍隊を有してゐる。しかしながら今日と雖、其れは、立派な訓練を有せず、立派な組織を有してゐないのだ。この事實を等閑に附し、或は其れを承認するのを恐れたことは、その問題に偉大な損害を與へてゐる。されば吾々は、この軍隊を、其れが訓練さる可きであるがやうに、實務的な樣式に訓練なし、其れが組織さる可きであるがやうに、其れを組織しなければならない。かくして吾々は、極めて眞劍に極めて注意深く、吾吾自らを吟味なし、吾々自身の運動の經驗から學ばなければならない。即ち吾々は、あらゆる種類の實習、あらゆる種類の戰闘、及び攻擊や退却の行動に於て、其れを訓練しなければならない。而も、この長時間の困難な訓練なしには、勝利は、不可能なのである……。

（一）、以下の八行は英譯による――譯者。

二十、コンミユニスト・インターナショナルのセクシヨンに對する組織問題に就いてのレエニンの遺言

（コンミユニスト、インターナショナルの第四回大會に於ける同志レエニンの演說から）

一九二一年第三回大會に於て、吾々は、共產黨の組織構成及び、その活動の方法及び內容に就いて、決議を採用してゐる。この決議は、優秀なものである。しかしながら決議は、殆どロシアのことばかりを述べたもので、卽ちロシアの發達の總てに基づいたものである。其れは、決議に於ける長所であるが、同時に短所でもあるのだ。其れが短所だといふのは、殆ど何人でも、外國人は——私はこれを述べる前に、この決議をもう一度讀み返して見たのであるが、これが私の確信である——其れを讀むことが出來ない。第一に其れは、あまりに長たらしくて、五十乃至それ以上の項目である。外國人は普通、そのやうなものを讀みはしないのである。第二に、たとへ彼等が、其れを讀んだとしても、其れはあまりにもロシア的であるが故に、外國人には誰れにも、

理解することが出來ないのだ。而も其れは、立派にあらゆる國語に飜譯されてゐるが故に、ロシア語で書かれてゐる爲めといふのではなくして、其れが全然、ロシア的精神によつて貫かれてゐるからであると云はなければならない。而して第三に、たとへ外國人が其れを、稀れに理解したとしても、其れを實現することは出來ない。其れが卽ち、第三の弊害なのである。

私は、こゝに出席してをられる二三の代議員諸君とは、少しく會談なしたが、願はくば、私は、これから先の大會に於ても——私は大會に自ら參加しないであらうし、殘念ながら參加することが出來ないが——幸ひ、各國からの代議員諸君のより多數と、親しく會談するの機會を持ちたいと思ふ。私が受けた印象は、この決議に於て吾々が、一つの大きな誤謬を犯してゐるといふこと、卽ち吾々が自ら、より廣汎な發達への道を、遮斷してゐるといふことである。既に述べたやうにこの決議は、優秀なものなので、五十乃至それ以上の項目總てに、私は署名なすであらう。しかしながら吾々は、我がロシアの經驗を、如何にして外國人に持ち來す可きであつたかを、理解してゐなかつたのだ。卽ち決議の中の總ては、死せる文字にとどまつてゐるのであつて、もしも吾吾が、これを理解しないならば、吾々は何らの前進をも遂げ得ないであらう。

私は、吾々總てのものにとつて、卽ちロシヤ人並びに外國人にとつて、最も重要なことは、吾

々が今や、五ケ年間のロシヤ革命に就いて、學ばなければならないといふことである。而も吾々はやうやく今や、學ぶ可き機會を有してゐるのである。私は、この機會が、如何ほど長時間存續するかを知らない。如何ほど長時間、資本主義的列國が、吾々にこの機會を與へて、平和な研究をゆるすかを知らない。しかし吾々は、軍事的行動、即ち戰爭から解放されてゐるあらゆる瞬間を、研究の爲めに、而も最初からして利用しなければならない。ロシアの黨全體及び總ての他の社會層は、彼等の教育不足といふことによつて、其れを立證してゐる。教育に對するこの熱望は、今や吾々にとつての最も重要な任務が、研究また研究をなすことにあることを示してゐるものである。

しかしながらまた、外國の人々も研究しなければならない、吾々に缺けてゐるところの、讀んだり書いたり、讀んだことを理解したりするやうなことを、吾々が學ばなければならないのと同じ意味に於てではなしに。——そのことが、プロレタリア教化に屬するか、ブルヂョア教化に屬するかといふことは、議論になるが——私は、この問題には觸れないことにしよう。あらゆる場合に於て吾々は、特に讀んだり書いたり、讀んだことのまた理解を學んだりしなければならないことを、大いに必要とする。しかし外國の諸君は、何らかより高度のものを必要としてゐる。即ち

第一に、彼等は、吾々が共産黨の組織構造に就いて書いたところのものが何であるか、また彼等外國の諸君が、讀みもせず理解もせずに、署名してゐるところのものが何であるか、其れをまた理解せんと欲するものだ。そのことは、彼等の偉大な任務であらねばならない。而してこの決議を、現實に持ち來さなければならない。而して其れは、一夜ではなし得ないし、また全然不可能である。この決議たるや、あまりにもロシア的であつて、大いにロシアの經驗を反映してゐるものである。かゝるが故に、其れは外國の諸君には理解されず、外國の諸君はまた諸君で、この決議を聖像の如く壁の上にかけ、祈禱なすことによつて、滿足することは出來ないし、またそのことによつて、何事をも成就することが出來ない。從つて彼等は、決議の中のロシア的經驗の部分を、よく把握しておかなければならないのだ。

その把握が、如何にしてなされるかといふことは、私は知らない。しかし、例へばイタリイのフアシスチは、おそらく吾々に、イタリイ人がまだ大して教育されてをらず、從つてこの國に於ては猶ほ、黑白人組（ブラウク、ハンドレッズ）の發生の可能性がなくはなかつたといふことを、彼等が聲明してゐるのにかんがみて、よき貢獻を與へてゐるものである。おそらく其れは、非常に有益なものである。かくて吾々ロシヤ人は、同じ方法によつてまた、この決議の發端に就いて、外國の人々に聲明しな

ければならない。さもなければ彼等は全然、この決議を遵奉することが出來ないのだ。この意味に於ては吾々が、當面の來る可き時期にとつて最も重要なことが、學ぶことにあるといふことを、單にロシヤ人のみではなく、外國の諸君にも主張しなければならないことを、私は確信するものである。吾々は普通の意味に於て學んでゐるのであるが、外國の諸君は、〇〇〇〇〇に於て學び、〇〇〇〇活動の組織、構造、方法、意義を、眞に理解しなければならない。かくて其れがなし遂げられた曉には、〇〇〇〇の豫想は、單によいものであるばかりではなく、すばらしいものであるであらう。

（をはり）

索引

1、クリチエヴスキイとマルチノフは、『經濟派』の指導者であり、また『ロシヤ社會民主々義同盟』の機關紙、卽ち一連のロシヤ社會民主々義者の間に、日和見主義的傾向を發生せしめたところの、かの『ラボーチエ・デエロ』（勞働事情）の編輯者であつた。（一八九九年四月から、一九〇二年三月に至るまで、全體で十二號を數へた）この『ラボーチエ・デエロ』は、第一に、『經濟派』及び『政治派』の宣傳が、二つの異れる、しかしながら一の本質的な樣相と、同一の過程を有するといふこと及び、第二には、最も重要なものは、勞働階級の自然發生的な運動であるといふことを主張した。而してマルチノフは、ロシヤ社會民主勞働黨の第二同黨大會の後、自らメンシエヴイキ・フラクションを結成し、其の後彼れは、その最もすぐれた指導者の一人となつた。而も彼れは、大戰中は、『インターナショナリスト』であつた。一九二二年には、ロシヤ共產黨に加入した。

2、勞働階級解放の爲めのペテルスブルグ闘爭團體は、一八九四年に、社會民主々義宣傳者の團體からつくられたものだ。當時レエニン、マルトフ、クリチサノヴスキイ及び其の他のものが、その團體で働いてゐた。一八九五年十二月九日に、この團體は、警察の手で破壞され、最も目立つてゐた指導者達は逮捕された。この意味に於て、その團體の〇〇〇活動力は、一八九七年に死滅してしまつた。そしてそこに、『經濟派』の華美な花が開き、『些細な問題』の戰術が、勞働階級の解放——といふ主要な目的を隱蔽してしまつた。ところが一八九七年に、ペテルスブルグ闘爭團體は次のやうな任務を有する、『ラボーチヤイヤ・ミスル』(勞働思想)といふ、社會民主々義新聞の發行にとりかかつた。その任務は、『經濟事情の改善の爲めの闘爭、差し迫れる日常の利益に立脚しての、資本に對する闘爭、及びこれ等の闘爭の手段としてのストライキ』といふことであつて其れは、政治的闘爭及び中央集權化された政黨なるものを否定し、勞働運動に於ける自然發生を、讃美しなどしたのである。されば革命的社會民主々義者の任務及び戰術を、完全な程度に擁護なしたところの、レエニンをその尖端にいただく『イスクラ』(火花)は『ラボーチエ・デエロ』に對すると同樣に、『ラボーチヤイヤ・ミスル』に對しても、痛烈な闘爭を行つた。

3、ズウバトフ、即ちオクラナ(政治政策)のモスコウ支部長は、ツアーリズムが望むがやうな方面に、成長しつゝあつたプロレタリア運動を、向けようとつとめた。この目的の爲めに、一九〇二年モスコウに於ては、彼れの指導の下に、『機械工場勞働者の相互扶助團體』が創立された。その團體の幹部には、同時にオクラナの手先をつとめた勞働者がなつてゐた。而して勞働者の共鳴を獲得する爲めには、實にその團體は、いくつかのストライキをオルガナイズし、そのことによつて、ブルヂヨアジーに對する勞働者の階級的敵意を、自然深めて行つた。オゼロフとウオルムスは、モスコウ大學教授であつて、ズウバトフの戰術を支持した連中であつた。しかしながらズウバトフ主義者達は、何ら偉大な成功ををさめなかつた。勞働者達は、彼等の眞實の本體を見究め、而も彼等を否定し去つたのである。

4、索引の1を見よ。

5、『スボボーダ』(自由)は、精神錯亂的な筆者ナデシデン(ケレンスキイ)の機關紙で、一九〇一年から一九〇三年まで發行されてゐた。しかし其れは、ロシヤ社會民主々義史に、何ら特殊な

具體的な足跡をとどめなかつた。

6、B——Wは、當時社會民主々義者であり、『ペテルスブルグ鬪爭團體』の成員であつたB、W、サヴインコフの匿名であつた。彼れは流刑中に、ナロードニキ(人民派)に變り、社會革命黨に加入した。而して一九〇三年には、彼れは、スパイのアゼフによつて創立された『鬪爭組織』なるものに加入した。晩年に於ける、社會革命黨の殆どあらゆるすぐれたテロリスト的行動は、サヴインコフによつて導かれたものである。かくて大戰中彼れは、狂暴な愛國者になり、一九一七年には、ケレンスキイの右腕となり、十月革命後に於ては、積極的な反革命家となり、フランスの資本家から、自分の活動に對して、金を貰つてゐた人物であつた。

7、『ゼムリヤ・I・ボリヤ』(土地と自由)は、ナロードニキに所屬する非政治的な叛逆者によつて、一八七六年に創立された一の組織體で、社會主義の實現が、農民の村落共產體によつて、期待し得るとなしたところのものであつた。而して一八九七年に、この『ゼムリヤ・I・ボリヤ』は、『ナロードボルツイ』(人民解放者)と【チエルニベレデルツイ』(土地分配者)に分裂した。『チ

エルニ・ベレデル』(一般的分配)といふ集團は、長期に亘つて存續しなかつたが(その集團の中からは、ロシヤに於ける初期のマルクス主義者、卽ちプレハノフやザスリッチなどが現れ、一八八三年には、最初の社會民主々義的な組織『勞働解放團體』を創立した)、以前の戰術を存續することの爲めに鬪つた。其れは、基本的な標語として、一般的な土地の分配、地主からの土地の收用といふことを唱へた。『ナロードナヤ・ボリヤ』(人民の自由)は、〇〇〇〇及びその手先に對する鬪爭を、〇〇〇〇〇〇で前面に進めた。而して『ナロードナヤ・ボリヤ』は、執行委員會評決の結果、皇帝アレキサンダー第二世の一八八一年三月一日に滅亡した。また八十年代の半ばに於ては、ツアー政府はスパイの力で、『ナロードボルツイ』を、實踐的〇〇〇〇なりとして、これを滅してしまつた。

8、『ストルウビズム』は、ペーター・ストルウベの名に關聯してゐるものであつて、ストルウベとは、九十年代に於ける『合法的マルクス主義者』であつた。彼れは、一八九八年に於けるロシヤ社會民主勞働黨の第一回黨大會に參加し、二十世紀の頭初に於ては、自由主義ブルヂヨアジーの指導者となり、最後には狂暴な反革命家にそれからモナーキストになつた。

9、『ヴエラ・ザスウリッチ』は、もとは『ゼムリヤ・I・ボリヤ』の一員で、後には一八八三年に創立されたところの『勞働解放』のマルクス主義的團體の一員となつた。また『イスクラ』紙の編輯局の一員であつた。帝國主義戰爭の期間には、狂暴な愛國家となり、ボルシエヴイキの敵手となつた。

10、『ザリヤ』(曙光)は、通俗科學的なマルクス主義的雜誌で、プレハノフやヴエラ・ザスウリッチやP・アクセルロッドの編輯の下に、即ち舊『イスクラ』の協力者の協力の下に、一九〇一年から一九〇二年まで發行されてゐた。この『ザリヤ』には、レエニンの筆になるいくつかの論文が發表された。

11、『ナカヌネ』(前夜)は、社會革命黨の雜誌で、セレブリヤコフによつて、ロンドンに於て發行されたものである。

12、ブレハノフ及び『ブレハノフ主義者』は、當時〇〇〇マルクス主義者であつた。ロシヤ社會民主主義黨が、ボルシエヴイキとメンシエヴイキとに分裂した後は、最初ブレハノフは、ボルシエヴイキと手をとつてゐたが、やがてメンシエヴイキの方へ行つた。而して帝國主義戰爭の期間には、彼れは狂暴な愛國家となり、一九一八年に死んだ。

13、ミシキンは、一八七七年から七八年に至る期間に於ける『一九三人事件』の(ゼムレボルツイの)著名な人物である。ゼリアボフは、有名なナロードボレッで、ロガチエヴとペロヴスカヤ等と共に、即ちアレキサンダー二世〇〇〇〇〇〇〇〇、彼等三人は、死刑に處せられた。ヴエラ・フイグナーはまた、『ナロードナヤ・ボリヤ』團體の秀でた一員で、二十年間シュリユッゼルブルグ要塞監獄に囚はれてゐた。

14、ZO——中央機關紙(當時は『イスクラ』)。

15、RSDAP——ロシヤ社會民主勞働黨は、一八九八年第一回黨大會に於て創立された。

16、『○○○ロシヤ社會民主々義の在外同盟』は、二十世紀の頭初に、日和見主義的『ロシヤ社會民主々義者在外圖體』に對する對立的勢力として、『イスクラ派』によつて創立されたものであつた。第二回黨大會に於ける黨の分裂に伴ひ、この同盟内にもまた苦々しき鬪爭が起つた。而して多數派をしめたのは、メンシエヴイキであつた。

17、索引の第五を見よ。

18、ペーター・アレキセエーフは、機織職工で、七十年代に於ける頭のいゝ頑强な○○家で、一八七七年の『五十人事件』では著名な人物である。彼れは裁判所で、輝ける辯論をなし、二十年間の苦役を宣告され、遂にシベリヤで死んだ。カルトウリンはこれもまた勞働者であつて、ナロードボレツで、而も『ロシヤ勞働者の南部同盟』のオルガナイザーであつた。彼れは、ツアー宮殿○○○○○○○○○○○○○○○、一八八〇年に○○○○○○○○○。ミシキンとツエリヤボフに就いては、索引十三を見よ。

19、新『イスクラ』は、メンシエヴイキ『イスクラ』で、第二回黨大會後、其れはメンシエヴイキの手に落ちたのであつた。

20、リベル(バエル)――M・I・ゴルドマンは、猶太人勞働者團體の中のすぐれた勞働者であつて、中央委員會の一委員で、後にはメンシエヴイキ淸算主義者になつた。而して帝國主義戰爭の期間に於ては、愛國主義者となり、革命期に於ては、ブルヂヨアジーとの提携の主唱者で、ソヴイエット政府の敵である。

21、『ジツク、ザツクのかたちで、徐々に前進せよ!』とは、第二回黨大會後に、メンシエヴイキの指導者となつたマルトフによつて述べられた號令であつた。

22、クボステズムとは、事件に歩調を合はせてゆくことの出來ないことを、卽ち後にくつついてゆくことを意味する(ロシヤ語のクボスト、シユバンツから來たもの)

23、同盟、索引第十六を見よ。

24、ブンドは、一般的な猶太人の勞働團體であつて、一八九七年に創立されたもので、ロシヤ社會民主黨の第一回黨大會に於て、ロシヤ社會民主勞働黨に加はり、しかし一九〇三年の黨の聯合的構造をつくることを拒否した第二回黨大會に於ては、其れは退席し、更らに一九〇六年の第四回黨大會に出席しては、清算派を支持し、而も大戰中は、ブンド主義者の大多數は、愛國主義者となり、社會平和主義者(リベル及びアブラモヴイッチ)となつた。かくてまた、〇〇〇〇に於て、このブンドは、〇〇〇されて來て、プロレタリア大衆の壓力の下に於ては、一九二一年遂にロシヤ共産黨に加入した。

25、ロシア社會民主勞働黨の第二回黨大會後の十四ケ月。

26、パルフウスは、獨逸人中最初にして秀でた黨員であつて、彼れはロシヤ社會民主黨に於て一九〇五年には、同志トロツキイと共に活動なし、『永遠の〇〇』を主張してゐた。ところが帝國主義戰爭中は、社會主義の背敎者となり、帝國主義者ヴイルヘルム二世及び獨逸ブルヂヨアジーの辯護者となつた。

27、ガポン、僧侶で、ペテルスブルグに於けるズウバトフ主義の『ロシヤ工場勞働者團體』(索引第三を參照)の組織者で、一九〇五年正月二十二日、〇〇〇〇〇〇〇對して、勞働大衆を向けた發案者であり主謀者であつた。その『〇〇らされた安息日』以後、彼れは外國を巡歷し、やがて社會革命黨に心を傾けて行つた。而してオクラナに對する關係を果した後、彼れは、一九〇六年に死んだ。

28、黨に對するボルシエヴイキ中央委員會の聲明は、第四回黨大會の召集を意味してゐる。

29、一九〇四年メンシエヴイキによつて、先づ第一に、小册子が出版され、次ぎに一九〇五年ボルシエヴイキによつて出版された。

30、ロシヤ社會民主勞働黨の第三回黨大會は、一九〇五年ロンドンに於て行はれた。メンシエヴイキは、それに參加しなかつた。彼等は同時に、狹小な協議會をゲンフに於て召集した。

31、この協議會の決議（組織問題に關する）は、吾々は上に述べておいた。

（以上）

改造文庫 第一部 第三十九篇
組織論 定價三十錢
著者 鈴木厚
發行者 山本三生 東京市芝區愛宕下町四ノ六
印刷者 竹内喜太郎 東京市牛込區榎町七番地
昭和四年八月一日印刷
昭和四年八月十一日發行
（禁無斷複製）
所有 權利
發兌 改造社 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番至一一二四番
日清印刷株式會社印刷

我社は世界に於ける出版界の革命者である。廉價全集の創始者である。我社が大正十五年十一月多大の犧牲を豫期して廉價全集を發行するや、感激の聲國内を震撼し、日日數千通の感謝狀が舞ひ込んだ、今迄特權階級のみの藝術であり、哲學であり、經濟、美術、科學であつたものが無產階級の全野に解放されてからは全國を通じて讀書階級が一時に數十倍となつた。この劃期的現象を招來し、我國の文化を一時に引上げ文化史上赫々たる我社は、尙當時の宣言の徹底を期して玆に「改造文庫」を發刊せんとす。尙その内容は別記の如くであるが、我社は數十年を期してあらゆる權威ある著作を本集に網羅して民衆的一大文庫を建設せんと欲す。諸君の期待と支持を俟つ。

□此の文庫は、内容の嚴選と最低の廉價とを以て第一義とし、專ら大衆普及を目的として刊行す。
□此文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亙り、校訂、註釋、飜譯、總て典據たるべきを期す。
□此文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歷史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。
□表紙上の番號は單に發行順を示すものなれど、將來檢索上の便宜をも考慮に容れて之を示す。
□一冊の分量は約百頁以上五百頁とし定價は約百頁を單位として拾錢としその冊子の頁に應じて二十錢、三十錢、四十錢、五十錢とす、但、地圖附錄等挿入の場合は、必らずしもこの例に依らず。
□表紙意匠中、1は十錢、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。
□定價及び送料左表の如し。

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	一〇	二〇	三〇	四〇	五〇	六〇	七〇	八〇
送料(錢)	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六

改造文庫第一部目錄

第一篇 富國論(上卷) アダム・スミス著(刊近)
第二篇 富國論(中卷) アダム・スミス著(刊近)
第三篇 富國論(下卷) アダム・スミス著(刊近)
第四篇 人口論 ロバート・マルサス著(刊近)
第五篇 經濟學原理 デヰド・リカアド著(刊近)
第六篇 經濟學原理(上卷) スチュアド・ミル著(刊近)
第七篇 經濟學原理(下卷) スチュアド・ミル著(刊近)
第八篇 經濟學方法論 カール・メンガー著(刊近)
第九篇 經濟學原理 チェボンス著(刊近)
第一〇篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 1
第一一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 1
第一二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 2
第一三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 1
第一四篇 神と國家 バクーニン著 木莊可宗譯 1
第一五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 6
第一六篇 古代社會(上卷) モルガン著(刊近)
第一七篇 古代社會(下卷) モルガン著(刊近)
第一八篇 エミール(上卷) ルソー著 内山賢次譯 4

第一九篇 エミール（下卷） ルーソウ著 内山賢次譯 4

第二〇篇 國家論 オツペンハイマー著 廣島定吉譯 2

第二一篇 金融資本論 猪俣津南雄著 4

第二二篇 日本開化小史 田口卯吉著 2

第二三篇 日本經濟論 田口卯吉著 1

第二四篇 日本經濟學說の要領 經濟的帝國論 瀧本誠一著 2

第二五篇 日本商業史 横井時冬著 4

第二六篇 日本工業史 横井時冬著 4

第二七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2

第二八篇 リッケルト論文集 リッケルト著 2

第二九篇 フッサール論文集 フッサール著（刊近）

第三〇篇 女工哀史 細井和喜藏著 4

第三一篇 婦人解放論 スチュアド・ミル著（刊近）

第三二篇 社會進化と婦人の地位 ラツバポート著 山川菊榮譯 2

第三三篇 共産主義小兒病 レーニン著（刊近）

第三四篇 二十世紀初頭の農村問題 レーニン著（刊近）

第三五篇 文學と革命 トロツキイ著（刊近）

第三六篇 幸德秋水集 幸德秋水著 2

第三七篇 中江兆民集 中江兆民著 2

第三八篇 財産起源論 レヴインスキー著 貴島克己譯 1

第三九篇 組織論 鈴木レエニン厚譯 3

第四〇篇 三民主義 孫中山著 金井寛三譯 3

第四一篇 唯一者とその所有 マツクス・スティルネル著 辻潤譯 6

第四二篇 世事見聞錄 武陽隱士著 本庄榮治郎校訂（刊近）

第四三篇 金融資本論 全譯 ヒルファディング著 林要譯（刊近）

第四四篇 近世封建社會の研究 本庄榮治郎著（刊近）

第四五篇 近世農村問題史論 本庄榮治郎著（刊近）

第四六篇 マルクスの歷史、社會並に國家理論（上卷） ハインリッヒ・クノー著 鳥海森谷濱島共譯（刊近）

第四七篇 マルクスの歷史、社會並に國家理論（下卷） ハインリッヒ・クノー著 鳥海森谷濱島共譯（刊近）

第四八篇 マルキシズム國家觀 マックス・アドラー著 山本琴譯 5

第四九篇 マルクス主義經濟學 河上肇著（刊近）

（以下續刊）

改造文庫第二部目錄

第一篇 古事記 澤瀉久孝校訂（刊近）
第二篇 萬葉集（上卷） 折口信夫校訂（刊近）
第三篇 萬葉集（下卷） 折口信夫校訂（刊近）
第四篇 古今集 吉澤義則校註（刊近）
第五篇 新古今集 吉澤義則校註（刊近）
第六篇 新編源氏物語（上卷） 折口信夫校註（刊近）
第七篇 新編源氏物語（下卷） 折口信夫校註（刊近）
第八篇 枕草紙 山岸德平校訂（刊近）
第九篇 金槐集 幸田露伴校註（刊近）
第一〇篇 平家物語（刊近）
第一一篇 雨月物語 山口剛校訂（刊近）
第一二篇 山家集 齋藤茂吉校註（刊近）
第一三篇 俳諧七部集 萩原蘿月校訂 3
第一四篇 蕪村七部集 萩原蘿月校訂 2
第一五篇 伊勢物語 久松潛一校訂（刊近）
第一六篇 神皇正統記 宮地直一校註 3
第一七篇 奥の細道 芭蕉翁文集 萩原蘿月校訂 3
第一八篇 女殺油地獄 曾根崎心中 黑木勘藏校註（刊近）
第一九篇 心中天島宴 冥途飛脚 黑木勘藏校註（刊近）
第二〇篇 國姓爺合戰 黑木勘藏校註（刊近）
第二一篇 槍權三重帷子 夕霧阿波鳴門 黑木勘藏校註（刊近）
第二二篇 心中重井筒 丹波與作 黑木勘藏校註（刊近）
第二三篇 山崎與次兵衛壽門松、心中宵庚申 黑木勘藏校註（刊近）
第二四篇 傾城反魂香 黑木勘藏校註（刊近）
第二五篇 淀鯉田世瀧德 長町女腹切 黑木勘藏校註（刊近）
第二六篇 堀川波鼓 博多小女郎波枕 黑木勘藏校註（刊近）
第二七篇 五十年忌歌念佛 大經師昔暦 黑木勘藏校註（刊近）
第二八篇 菅原傳受手習鑑 假名手本忠臣藏 黑木勘藏校註（刊近）
第二九篇 八百屋お七歌祭文 お染久松袂の白絞り 黑木勘藏校註（刊近）
第三〇篇 伊賀越道中双六 一谷嫩軍記 黑木勘藏校註（刊近）
第三一篇 大鏡 吉澤義則校註（刊近）
第三二篇 徒然草 吉澤義則校註（刊近）
第三三篇 日蓮上人集（刊近）
第三四篇 親鸞聖人集（刊近）
第三五篇 北村透谷選集 島崎藤村編 1
第三六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著 1
第三七篇 平凡 二葉亭主人著 1
第三八篇 子規俳話 正岡子規著 3

第三九篇 子規歌話 正岡子規著（近刊）
第四〇篇 坊つちやん 夏目漱石著 2
第四一篇 草枕 夏目漱石著 2
第四二篇 それから 夏目漱石著 3
第四三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著 2
第四四篇 我等の一團と彼は天才である 石川啄木著 1
第四五篇 山陰土産その他 島崎藤村著 2
第四六篇 作曲白秋民謠集 北原白秋著 2
第四七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著 神近市子譯 2
第四八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 1
第四九篇 日輪 横光利一著 1
第五〇篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著 1
第五一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 2
第五二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 2
第五三篇 ホワイト・ファング 堺利彦譯 3
第五四篇 はやり唄 小杉天外著（近刊）
第五五篇 自選歌集 朝の螢 齋藤茂吉著 2
第五六篇 自選歌集 十年 島木赤彦著（近刊）
第五七篇 自選歌集 川のほとり 古泉千樫著 2
第五八篇 自選歌集 松の芽 中村憲吉著 2

第五九篇 自選歌集 海やまのあひだ 釋迢空著 4
第六〇篇 自選歌集 立春 木下利玄著 2
第六一篇 自選歌集 花樫 北原白秋著（近刊）
第六二篇 自選歌集 人間往來 與謝野晶子著 2
第六三篇 自選歌集 槻の木 窪田空穗著 2
第六四篇 自選歌集 野原の郭公 若山牧水著 2
第六五篇 自選歌集 原生林 前田夕暮著 3
第六六篇 自選歌集 空を仰ぐ 土岐善麿著 2
第六七篇 作曲白秋 童謠集 北原白秋著 2
第六八篇 作曲白秋 國民歌謠集 北原白秋著 2
第六九篇 作曲白秋 舞踊曲集 北原白秋著 2
第七〇篇 背徳者 アンドレ・ジッド著 石川淳譯 2
第七一篇 チェホフ書簡集 内山賢次譯 5
第七六篇 愚庵歌集 齋藤茂吉編（近刊）
第七七篇 芭蕉遺語集 荻原井泉水校訂（近刊）
第七八篇 七番日記（上卷） 荻原井泉水校訂（近刊）
第七九篇 七番日記（下卷） 荻原井泉水校訂（近刊）
第八〇篇 おらが春 荻原井泉水校訂（近刊）
第八二篇 新花つみ（蕪村日記） 荻原井泉水編（近刊）
第八八篇 寡婦マルタ エリイザ・オルゼシュコ著 清見陸郎譯 3

第八九篇　虚子句集　高濱虚子著（近刊）

第九〇篇　井泉水句集　荻原井泉水著　5

（以下續刊）

子規全集豫約募集

子規の藝術の如く眞に血を以て書かれ全人格を傾倒して綴られた大文學は何處に在る乎

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り、子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の園圃より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの。子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて清節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた、されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虚飾なく些の技巧なく、赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。「子規全集」十八卷は、日本文學中不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の燃烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持を俟つ。（内容次頁に在り）

『子規全集』豫約規定

□内容　全十八卷、總頁約八千頁。前版に漏れたる未發表の作品をも悉く收容す。

□體裁　本文四六判九ポイント組、一冊紙數平均約四百頁乃至五百七十頁口繪は子規居士の寫眞、短册、原稿、書簡、草畫等、見返しは居士寫生畫中の逸品「青梅」「櫻」「實」色刷、裝幀清麗無比

□頒布方法　豫約者にのみ頒つ、締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込み下さい。

□刊行期日　昭和四年七月第一回を刊行し爾後毎月一册づゝを刊行し昭和五年十二月を以て完結す。

□申込方法　先づ御申込みの際申込金として金壹圓を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尚申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません）

□會費　（一）毎月拂一册に付、壹圓。（二）一時拂全（十八卷）十七圓。

□送本料　會費の外に。送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尚書留送付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい。

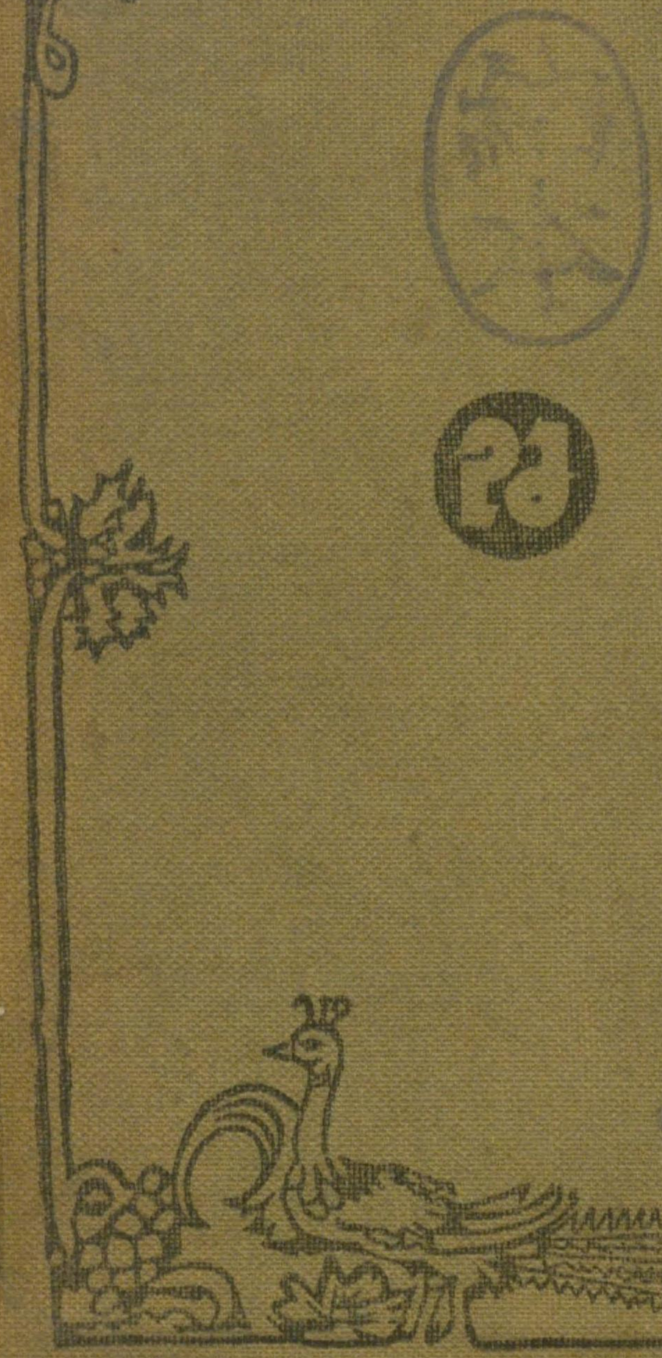
□拂込方法　振替貯金又は郵便爲替でその月の一日迄に着金するよう御拂込み下さい。

子規全集總內容

日本文學の金字塔

第一卷 俳句全集(第一卷)
第二卷 俳句全集(第二卷)
第三卷 俳句全集(第三卷)
第四卷 俳論及俳話(上卷)
第五卷 俳論及俳話(下卷)
第六卷 歌論歌話及評論
第七卷 和歌、新體詩、漢詩
第八卷 小說、紀行、小品
第九卷 少年時代創作篇(上卷)
第十卷 少年時代創作篇(下卷)
第十一卷 隨筆(上卷)
第十二卷 隨筆(下卷)
第十三卷 編著(上卷)
第十四卷 編著(下卷)
第十五卷 書簡(上卷)
第十六卷 書簡(中卷)
第十七卷 書簡(下卷)
第十八卷 未發表作品及年譜、藏書目錄

萬代不朽の名著

發行所 東京愛宕下區芝町 改造社 振替東京二〇四八

569
142